118
8
363

沙鍋調練坪内譚 全

宇金升編
尾形月耕画

共隆社上梓

詩經考釋

明治十九年十月三十日内務省版権

古來世に名を高ふし人に知らるゝ者濱の眞砂の算へ擧に遑あらずと雖も或は智仁勇或は忠孝貞操或は藝術職業或は[illegible]稽或は廉直或は奸曲其做す所各異なり然れども名を高ふ爲るあり惡に知らるゝあり芳臭雲泥の差あり善も惡も後人のから押並て是をとらゞ善も惡も後人懲すの一端とやあらん鶯亭大人夙に茲に甲寅五郎左衛門が剛膽と暴惡とを擧て一帙の物語に編し[illegible]の[illegible]沙鍋と齊しく遂に其身を碎いて塊と做せ草の種とするも根なし草にあらざるに請合ゆす處なりと證書は代て此序文と添るあるん

梅亭鵝叟識

博徒

坪内五良左衛門
善兵衛の娘千代
後ニ五良左衛門の妻水棹
博徒

生寺11
856

東京都立中央図書館蔵書

沙鍋調練坪内譚

第二回

東京　鶯亭金升編

三代將軍家定公の世ゐ至り武威漸く衰敗兇漢狗黨四方ゐ横行する今ゆ名を傳へて汚名と後代ゐ殘せし者多き中ゐ最剛膽たる坪内五郎左衛門の事跡を尋るゐ江城の西表二番左へ甍をつらね中央表門の正面ゐ玄關高く聳えし建千五百石を領する坪内伊豫守の本邸ゐて五郎左衛門五郎左衛門幼稚より武術と好み弓馬槍砲いづれも人ゐ勝れたりしが別て劍道ゐ秀るを以て武者修行がてら關八州の地勢を實地ゐ見極めんとを思ひたち十八歳の春その譯を書殘して竊ゐ屋敷を脱さり上総下総の諸道場ゐ擊劍を試みたる後下野の足利ゐいで吉田勝彌と呼ぶ者の出張稽古場ゐ足を止め近郷の擊劍家とも頻りゐ試合などして在り

しゞ一日吉田の稽古場ゟ半弓あると見て追鳥狩ゟして遊ゞんと梁田のこゝあた足利川のほとりなる稚菰の中ゟ分け入る折しも忍び音ゟ泣て堤を過る者ありけり是ハ何事ゟと見上れバ年の頃五十ばゝりゟる男と十七八なる女子と二人連だちて停止彼の男潸然として言りけるハ朽惜や我も往昔ハ由緒ゟる者なるゟ身上衰へて人の前ゟ腰を折るのみゟらず些少なる金ゟ事迫りて只一人の義理ゟる愛子を賣も過世の惡業なるべけれど子ハ怨いゟ孝心ふかく父ハ却つて養育べき便もなさゟ捨ゟ往く淺ましさよと掻口説バ女子ハ涙を押拭ひ爹さま痛く悔給ふな風流の數澤ハ妾のみならず親の爲同胞の爲ゟとて同じ瀬ゟ沈む河竹のよの例多ゟるを由なき歎きを人ゟ聞れて羞見せ給ひそと諫むれバ父も漸く涙を止め然言るゝはゞ詮ゟきハ我身なり悔の八千たび苦説とも返らぬ事をゟへり來る我子を待て形なき浮世ゟいゟで存命べき金こそ人の仇ゟりけり誘往くべしとて諸共に堤を北へ過るさへ屠所の羊ゟ異ゟらず五郎左衛門ハ眞菰の蔭ゟ在てそゝ

言を聞ゐ是ゝ全く親子ゐて去難き金ゆゑゐ女兒を賣よと思ふゐぞ元來親き疎さを攝ます此時ゝまだ人を憐びの心ありけれゞ是を見棄るゐ忍びず親子の二人ゐ乞むしと聲かけ弓もて眞拭かき分つゝ忙ゝしく走り出れゞ件の二人ゝ始めて人有しと知つて大いゐ驚き呼せ給ふゝ此方の事ゐやと問間ゐ五郎左衛門堤ゐ登り來て二人ゐ對ひ緣故を知らせねゞ怪しまるゝゝ道理なり我ゝ江戸番町へんの者ゐて劍術修行のため關東の諸國を遊歷なさんとて今足利ゐ在者なるゞ計らずゐん身らの言ふ所と聞ゞ事ゐ迫りて河竹の瀨ゐ立んとする女兒ゞ孝行父の慈愛聞くゐ痛ましく見るゐ忍びず思ふ子細あれゞ卒爾ゐ呼止めたりまづ情實を物ゞたられよ若し救ふべき事あらゞ一臂の勞を厭ゝずして救ひやすべしと言ゐ二人ゝ聞て深く悅び膝をり屈めて拜伏せしのみ霎時詞も出ざりしゞ稍ありて彼の男五郎左衛門ゐ對ひ偖ゝ劍道の修行者刀禰ゐて在しけるゝ拙老ゝこの堤の西在家新田村ゐ住る相田善兵衛とまうす者父の時までゝ田圃も夥ありて人も知りたる鄕士ゐりしゞ父早く世を去りて拙老ゐは幼少かりしゝゞ叔父ゐる者の爲ゐ押領せられ斯く窶しく世を渡るゐ妻ゝ四年餘り血虛の病ひゐうち樹し此春死去ゐ及びたり此故ゐ少々の田圃も質入し年具の未進も多く滯りて如何ゐとも詮術ゐきまゝ女兒の千代ゞ是を悲しみ其身を八木の驛ゐ賣て父の貧苦を救ゝんと致すなり任意非命の死をゐすとも勝母の里ゐ入りて盜泉を飲じと思ひ究めたれゞ別ゐ金の調ふべき手段なさゐ千代を伴ひて八木驛の娼家ゐ行よていと語るも面目ゐげゐりけり五郎左衛門聞て深く嗟嘆なし我いま旅ゐ在なれゞ力及ばぬゝ知らねゞ何ばかりゝ金ゐらゞ女兒を賣で事調ふやと問ゞ善兵衛答へて欲する處の金ゝ十五兩ゐりと言ふ五郎左衛門点頭て我左ばくりの金ゐゝ乏しからず取すべしとて物陰ゐ招き入れ十五金を取り出て善兵衛ゐ與へ我實ゐ千代とやらんゞ孝心を感するの餘り此庇を爲すのみ女子ゝ氏なきも貴きゐ至るとあり一度その身を千万人ゐ任しゐゞ何を以てゝ後の榮へを計るべき疾々その金と以

て村長ゞ呵嘖を脱れよと説諭せゞ親子ゝ夢かと斗り嬉しみて數回件の金を押戴き不覺ゐ落涙をたりしゞ雲時ゐりて善兵衛いふやう眞ゐ君ゝ拙愚親子の爲ゐ再生の恩人なり何ひまつれゞ足利の街ゐ御在留とある願くゝ女兒千代を參らせて枕の塵を拂ゝし聊高恩ゐ報ひ奉らめ此と聽し給へかしと言ふを五郎左衛門聞もわへず頭首をうち掉て否我ゝ武術修行の身なり且撃剣家の塾ゐ寄宿すれゞ如何で女子を召使ゝるべき掛ちん條ゝ再度いひも出ると勿れとて更よ請ひく氣色なし善兵衛ゐさねて宣ふところ理なれゞ仮令修行のうちの旅寐ゐもせよ一女子を召使ひ衣の垢附たるを濯し給ふとも誰か譏り誰か妨げん然れゞ剣家の塾へ御寄宿ゐてゝ厭ひ給ふ處も有ん程ゐ今より拙愚の家を旅宿と去給へかし千代ゝ拙老の家ゐ產れ拙老の子なれゞも實ゝ幕府の御旗本花井の乃禰の種なれゞ血統卑しと言ふあらぬと若この十五金なりせゞ立地ゐ宿傀儡となるべきゐ計らず由緒ある君の妻とならんこそ大なる幸福ゐり此事を聽し給ゝねゞ金も又受

ゞたしと言ふ然れゞも五郎左衛門ゐたく辞して從ゝず人の欲せざる處を強るゝ好意ゐあらず必ずしり多言して我を苦むると勿れと言ふ善兵衛も詮ずべゐく厚く悅び謝して親子新田村ゐ立歸り年貢の未進を殘りなく償ひ前ゐ五郎左衛門の旅宿ゝ聞置たる故是より折々五郎左衛門の許へ問たづね佐野山の松露足利川の鮎なゞ漁てゝ贈りけり坪内五郎左衛門ゝ思ゝず足利の地ゐ永逗留ゐなりしを悔吉田勝彌の塾を辞し館林を經て行田の方へ往んと立出たるゝ水無月の始めゐして夏の日の常癖なれゞ連山雲を吐て更ゐ奇峯を操り夕立さと降りて霹靂いたく鳴わたるゐ雨衣を着る間さへ無れゞ遽しく道邊なる伏屋の簷下ゐ走り入り撃剣道具を肩おせしまま雲時晴間を待たるゐ主人窓より差覗きて是ゝ恩人よくも來給ふものゝゐ娘よ早く出て恩人を迎へよりしと叫んで走り出る者を見るゐ是善兵衛ゐり千代も周章ふためきて出迎へ是ゝ能も訪せ給ひしとて裡ゐ誘ひ引入れゞ五郎左衛門ゝ思ひ掛ぬとゆゑ偖ゝ其方等の家ゐて有けるゝと斗りゐ

深く推辭とを得ず伴れて窓の下に到れば親子に過つる庇を言ひ出て塵さへ居ずこれを歎待し畜への年魚のさら燒に手造りの濁醪を汲もて出て是をすゝめ四表八表の物がたりに長き夏の日も暮あんとすれど五郎左衛門に別れを告て立らへらんと爲るを親子に叮嚀に止めて携たる袖と放さず迫て今宵一夜に語り明し給へと言ふ志しも默止難く元より旅の身何所へ往もみな他の家あれば其意に任せて止宿し夜もいたく深て臥房に入るに千代に枕方に到り團扇をもて蚊を追ひけり五郎左衛門この形容を見て首を擡げ是に何とてとく往て睡らざると言ふに千代に最耻しげに團扇を面に向し當つゝ去る日父のやしつる事と請引給へねど妾が身の賤きに羞て怨み奉る樣にわらぬが妾既に身を君に委ゆるして容られずと雖も別に緣ゆしを求むべき心あし加之此わたりに名高き惡漢藤六と呼るゝが數回媒妁を以て言するも五月蠅に又いうなる計較をおし迫るべうも計り難し よしや一夜の添臥に侍らずとも今宵諸共に此處にあかし其志しを致し今

より貴郎の權妻と稱せとさに妾に主ある身あり仮令藤六無理言ひ掛るも主ある女子を何ぞうせん家貧しく釣べき蚊屋なければ迫て通宵蚊を追ひまわらするにそと言ふ物云ひざまも田舍人に似げあくて貌てそ賤の女子なれ顏ばせいと艶麗にその性も又怜悧く見ゆれば五郎左衛門頻りに感激して斯まで言ふを推辭に志しを破るに似たり我に只おん身が生涯を過たせじとて强面ありつるものをと言ば千代に最嬉しき氣色にて君が一夜の情に百年の命もいうで惜かるべきと言ふも憎からず覺えて頓て同じ枕に臥せけり偖天も明ふければ善兵衛に千代を呼び起して諸共に飯を炊き早膳を進めまた濁醪をぞ温めて出しければ是を酌あげら五郎左衛門に善兵衛千代に對ひ坪内伊豫守の嫡子たる事また屋敷を脫いで武者修行する由なぞ委細にはなしさて問ふ千代へ無体に戀慕する藤六とやらんに何者あると聞紀されて善兵衛に持たる煙管を杖につき思に膝を進めたりけり

再説善兵衛ハ五郎左衛門ヲ對ひ千代を有無なく妻ヲ呉よと迫る者ハ勢力富五郎が子分のうちヲも名うての悪漢梁田の藤六と呼るゝ奴夫を媒妁するハ當村外れヲ住む寡婦ヲて一ッ家の老婆と渾名さるゝ強慾者なりと話し掛たる其折から門邊ヲ高く足音するゆゑ千代ハ夫りと窓から覗けバ果して例の一ッ家ヲるヲゼ目ませの知らせヲ善兵衛も察して早く徳利を隠し五郎左衛門を納戸の内ヲ窺ませたり此とき彼の老婆門の戸明て入り來り挨拶もなく四邊を見まハし二人揃ッて家とハ實ヲ折好りりき孫て頼まれたる藤六親分のヤし込を此方らの言ゲ隨意斷とつたら一人娘でハ呉られぬも無理ならず然らば此方より聟ヲ往ん持參の金ハ百両と定め先十両を當座の土産幸ひ今日ゲ吉日なれば今宵往べしとの言傳ゆゑ些も早くヲ前方ヲ話し悦ばせんと思ひ飛で來ましたヲ千代ばうハ髪でも結て支度といふを善兵衛うち消しァ、是々それハマァ何の事ヲ前方と始め餘りヲ人を蹈付た言ぶんと怒り掛れど耳ヲも入れず老婆ハホ、と冷笑ひ何だゥ急な様ヲれどヤし込だハ疾の事嫁ヲこそ遣られまいゲ藤六さんはどな働き者を聟ヲ取たらヲ前もヲ千代さんも言ぶんハ無いはづ善ハ急げ故障の無うち極て仕舞ゲ二人のため然ゲ吾儕ハほんの橋渡し藤六親分の詞を取次までの事媒妁ゲ後刻話しヲ來るとだうら百両の持參で氣ヲ入らずハ心の儘ヨ掛合て見るのハ宜ゲ先ハ名ヲ負ふ勢力風あらく吹れて大まいのヲ金を吸込む章魚娘がめん食ふ様でハ氣の毒千ばん能まァ考へて見ての上ヲおしサと怖しの詞の門口あらく引建てこそ出行けれ五郎左衛門納戸を立いで親子ヲ對ひ今の老婆の口うらヲて悪漢どもの趣向ハ知れたり我計らずも此際ヲ來合せたるゾ幸ひなる藤六とやらと始め夫ヲ附属破落戸ども目ヲ物見せて後の戒しめと爲すべしト言ッ、四邊を窺ひて二人を膝元ちうく招きその謀計ハ箇様々々云うくと聲と竊めてさし示せば善兵衛頭を打掉て娘の爲ヲ然はど迄力をヲ盡し下さるハ難有けれど先も名うての

長脇差殊ゐ人數の程も知れねば危ふき事の極めなり斯る事も有んりと思ひたるゆゑ一寸通れの娘ゞ遣り場も頼み置たりト話すを五郎左衛門耳ゐ入れず呵々と打笑ひ仮令何人來るとも蠅ゐ齊しき破落戸ども更ゐ氣遣ひあるべからず我意ゐ任せ置れよとて他の言を用ゆべき樣無れば千代も善兵衛も互共よ心許なきの限りあれど其爲す所を諫めゝね遂ゐ五郎左衛門の指揮ゐ從ゞひ夫々の准備して彼らゞ音信とぞ待ゐける窓の日影やうやく落野寺の鐘の音入相を促すころ三四人の足音して小唄あゞ謠ひながら來る者あるゆゑ善兵衛夫と耳聳てる間もあらず門口より喧々と入來るを見るゐ何れも長脇差と横たへし雲突ばりの大男ゐて前ゐ立たる二人會釋もなく上り込で勝手ゐ座を占め善兵衛よ對ひ我らい國定忠次の子ぶん太田の熊三。是い佐原の喜三郎の子うた相生の源八と名のりし後熊三膝を搖り進め豫て一ッ家の慾よか娶より申し込だる縁組い我々二人ゞ媒妁役貴道吉日ゆゑ婚姻の式と今宵と定め聟ぞの梁田の藤六兄貴も御入興ゐ程

あい夫ゐ附て聊ゝ盃ゞら祝ひの印と言へば源八後方を向き持參の品を此方へとの指揮ゐ從ゞひ是も齊しく長脇差を横たへたる野蠻男ゞ擔げ來りし酒の樽鹽魚鮪の種々を板の間せましと置双べれば源八点頭よし〳〵汝等い歸つて藤六親分を早くと促し目出たく家ゐ飲で居やれと言れて一同口と揃へそんゐら四海波風ゞ立たと聞ば駈つける厥より好目を所望の我々比翼の床より備後の盃莞莚太田の紋ぶん桐生の親ぶんはど宜く此場と頼むせと破戸建てぞ出往きける善兵衛い是ゞで一言をも發せずありしゞ熊三源八の二人ゐ對ひ藤六刀禰を聟ゐせよとの御兩所の話し其相談ゐ乘るまい物でも無けれど突然すぎて返辞ゞ出來ぬ然ゞ藤六親分も來るとなら持參の酒と肴を開き一盃汲みもて待給へと可非つゝずの答へゐ二人い顔見合せて居たりしゞ源八詞を和らげて是りやア主翁のいふ通ゞ兄貴を待て話しを極たら我らゐ耻もかゝすめへ若その上で調はずハ。ナア好ゝ豫ての仕くみゐト目で知らすれば熊三も張たる肘を緩めながら何さま

生殺しある主翁の挨拶まづい承知と此方できめ先々飲うと善兵衛ゐ言つけぶつ〳〵切の鮪の調理ゐ酒温めて携え來りし百目蠟燭座中ゐ燈し取る猪口も差向ひ二人い酔を催すところ藤六もまた出來り媒妁ぢ苦らうト善兵衛を尻目ゐ見ゐゞら鼻ぞの何分頼むと座ゐ附て四邊見まわし。コリヤ肝心のぢ本尊嫁女の見えぬい何樣した譯と面脹らせゞ熊三ゞ兄貴の來ぬうち此席へ居て置のい知て居れぞ耻しゞるい阿蒙兒の癖ゐくの一間ゐ在との事ゆゑ先其まゝゐして置たゞ智の來たのゐ夫でい濟ぬ媒妁やくだ我らゞ此座へ連て來やうと立揚り彼方の座敷へ這入りつゝ衣引被ぎ片すみゐ身を縮めたる千代ゞ手を採り無理ゐ此方へ引出して藤六ゞ側へ突やれゞ藤六微笑みいかゐ耻かしいとて綿帽子のかはりゐ衣被ぐとい内裏の官女も氣ゞ附めへ智と嫁と双んで居るゞ世間の式先こつちへと千代ゞ手を取らんと爲る腕かなたから確乎と取て捻かへされ。アゝ痛たゝ是りや何樣するとぞ面を縮め悶躁ところと引居て膝下ゐ押へ身動きさせず。熊三源八是を見れども阿蒙子娘の千代ゞ力ゐ藤六をかく易々と押えべくもわらざれい呆れたるのみ迷ひ解ず此時藤六苦しき聲ゐて熊三源八我を助けよ千代い鬼女だぞ鬼だ〳〵と叫ぶを聞千代呵々と打笑ひ鬼の正体それ見よと被ぎし衣を搔なぐり除れゞ坪内五郎左衛門なりけれゞ熊三源八もふたゝび驚きしゞ只一人の二才野郎何ほどの事や有んと突立さまゐ尻引からげ飛掛りつゝ熊三ゞ擊倒さんと振上る拳の下腹五郎左衛門ゐ蹴揚られウンと仰反まろぶ其間ゐ源八後方より五郎左衛門ゐ組つくを慢着な奴と腕首とり身を沈ませると見えたるゞ秘術の背負なげ源八ゐ筋斗うたせて寸轉倒前の柱へ投つけれゞ是も氣絶と爲したりけり五郎左衛門四邊を見まわし鼠ゐ齊しき悪漢ぞも此席ゐい最はや無りさて飽氣ない事りあと言ッゝ藤六を押へたる膝の力を少し緩め。コリヤ大馬鹿もの能く聞け今日本ゐその名轟く一刀流の擊劍家千葉周作の嫡男千葉周馬なるを知らざるゥ此家を老人女子と輕蔑押智ゐ這入んあぞゝい不埒千心ん手も足も捻折て後日の警め

ゐ爲んと思へど汝らが仲間ゐゐ我父の孫弟子多きゆゑ心を改むるとあらば宥さん夫とも辛き目見せやうと又膝頭ゐ力を入れ脊骨も折よと押挫げば藤六苦痛ゐ聲さへ出ず手をもみ合せ拜むも可笑く五郎左衛門さらば とて千代が衣服を脱すてながら傍ゐ除て座を占れど藤六脊筋を大く痛め立事ならねば霎時その儘顔のみ皺め居たりしが漸くゐ身を起し五郎左衛門の前ゐ手をつき頑性ゐまだ獨身なるゆゑ定まる妻の欲きまゝ斯る所業ゐ及びしふて色ゐ迷ふの誤りより出たる强談他ゐ悪意のあるゐ有られば免させ給へと詫ると聞五郎左衛門ゐは面を怒らせ此家の娘千代ゐ千葉周作ゐ由緒のもの又其方の博連ゐゐ周作の門人ゐはくあり其譯を以て此度ゐ汝たちが不埒を免すなり然れども以後ゐその罪を乾度正すべしト言つつ立て仰そり倒れゐる熊三源八ゐ一活いれて息ふき返させ其奴ふたりも連て戻れと詞烈しく言つくれば藤六ゐ脊骨の痛さを耐えて立。サア〳〵自己と歸るのだト熊三源八が袖を引ゐ熊三源八も小腹と押へ天窓と撫り夢のこゝちふて在たるが何ゐゐ知らねど五郎左衛門が先の手なみゐ恐れを爲せしゆゑ顔見合せるのみ言句も無く藤六ゐ從がひ三人狐鼠々々出行きたり善兵衛ゐ窓のすきより暗きゐ透して彼等が後を見おくり果裏の藪小屋ゐ隱しおきたる娘の千代を誘ひ來りて禮いふゐ神代のむらし稲田姫が山田の蛇の難と遁れし心地ゐやゐらん五郎左衛門鎖子ゐいふ彼等を縛し表むきゐヤし立て官の役人に引渡せば罪免てのち再度彼らが仇するまでも待す彼等の仲間意趣がへし抔とて來らん夫故ゐ千葉周作の名を借りたるなり其故ゐ彼等が仲間ゐゐ千葉の弟子すぢ多きを以て假令三人の者どもが仕返し爲んと博徒らを談合も周作の由緒と聞てゐ人々容易ゐ手ゐ下さじ其内ゐゐ此方の趣向かやう〳〵と又も二人ゐ低語けり却説藤六熊三源八の三人ゐ善兵衛の家をいで氣の緩みゐや渾身ます〳〵痛みければ苦しき面を去りめながら十町ばかり來る折から長脇差横たへ後背鉢まき繩摩ゐて走せ來りし大勢ゐ先ゐ酒肴を持せし子分共あるゐぞ藤六はやく是

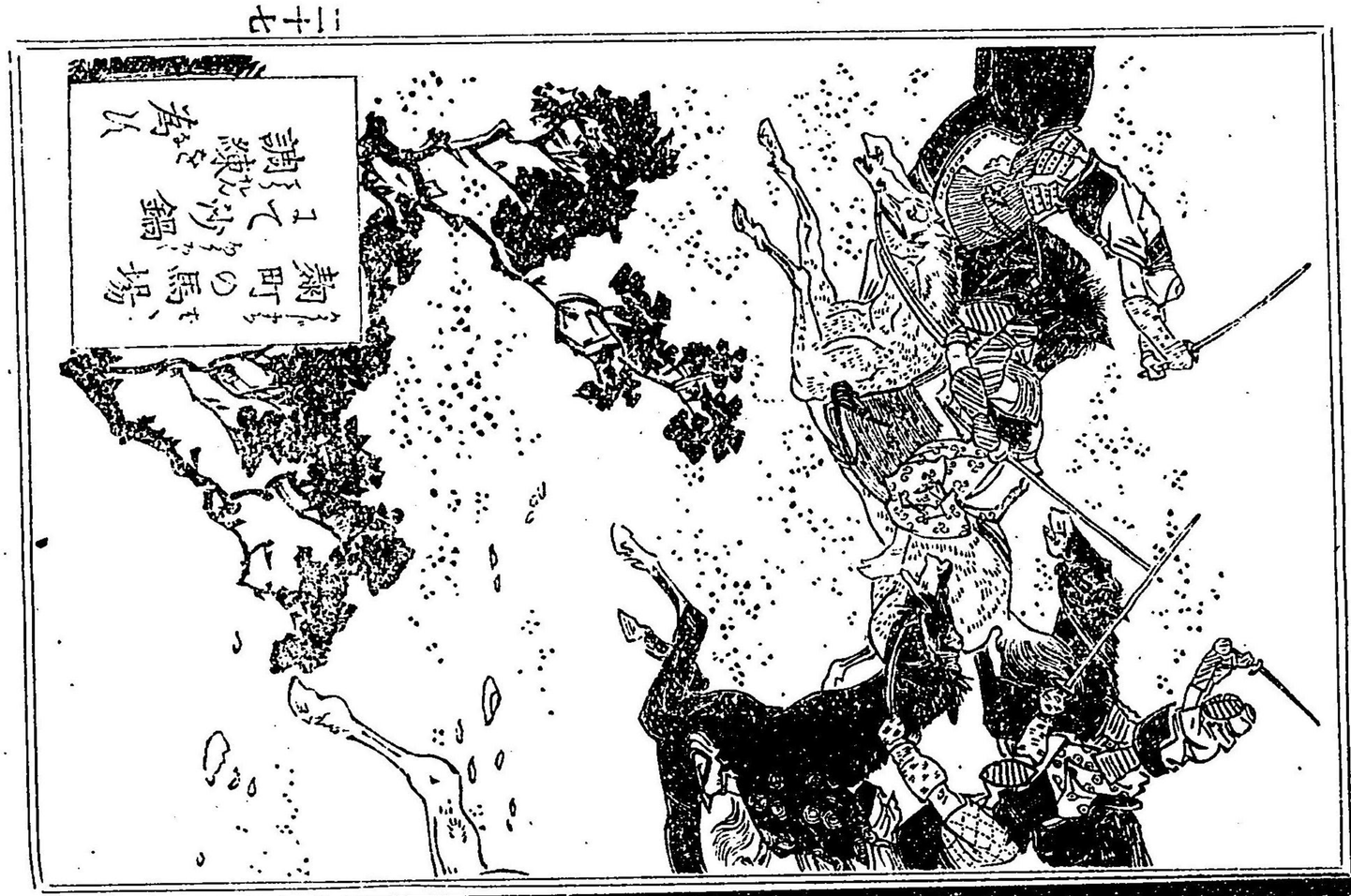
を見つけ是や其方たちゝ何事ありて何處へ往と聲かけれゞ一同そこゝ立止り左樣いはるゝ藤六親分熊三親ぶん源八親ぶんゝ我ら善兵衛ゞ家より歸り藤六親ぶんのためゝ打より婚姻式の喜び酒を飲で居ると一ッ家の娶ゞ飛で來て祝儀ゝありつきゞてら酒も飲うし肴のゝ餘りも貰はうと思ひ善兵衛の家へ往て見ると藤六親ぶん始め熊三親ぶん源八親分もゝ千代の爲ゝ捻ふせられ敵對ゝならぬ樣子だから早く救へよとの急報ゝ驚き其場ゝ居合せた者だけ駈付來りしるゝ親分たちゞ此處まで歸ッて來ると何れゝ去ても無事とゝ思へぬ何樣した譯だと息をきり〳〵問掛れゞ藤六も眞實とそれと明しかね去ばし口隱ゐたりしゞ。イヤサ其ゝ何樣した譯ゝ自己とゝ千代ゞ三三九度のその中へ蹈でんで來た一人の若者熊三兄貴と源八兄貴の手ゝ餘るから自已も共々力を添たゞ中〳〵な腕前容易かちゞ取れぬと察し物分れで歸るのだと聞て子分ら肘と張り親ぶんの婚禮を邪魔する奴打取で去まへゞソレと一同往かけるを熊三源八ゝし留め先々

まつたり其腕前の達者な奴ゝ千葉周作の悴といふと然て見れゞゝ前方のうちゝも千葉の弟子ゞあるゝら此夜ゝこの儘世間へ知れぬ樣ゝ徐と引どり篤と評議と去た上で仕返しと爲しゝ千代を卷揚る工夫ゞ上策と身体の痛みや五郎左衛門ゞ手なみを恐れ詞を飾つて後込するゝ子分どもゝ又周作の悴と聞き今までの勢ひぬけ然ちゞ今宵ゝ立かへり此仕返しゝ評議の上ゝて爲すべしと打連だちて梁田なる藤六ゞ家ゝ戻りたれど藤六熊三源八の三人ゝ兎角渾身いたみ働き自由ならぬゆゑ何の彼のと仕かへしを言ひ延し兩三日を經しうちゝ千葉周作の子ゝ盡く家ゝ在り殊ゝ周馬と呼ぶ者ゝ無しとの事と子分の者ゞ紛し來り頻りゝ仕返しを勸むるゝ今ゝ身體の痛みも少し愈ける故然ちゞ善兵衛ゞ家ゝ押しよせ彼の若者をうち殺し善兵衛の有無と言ゝさずゝ千代を奪ひ來らんと梁田の藤六太田の熊三桐生の源八ゝ子分十三人を引つれ先ゝ懲て嚴重なる准備なし各小銃を懷中ゝして彼ゝ表これゝ裏と手筈をさだめ善兵衛の家へ押よせ見れゞ是ゝ如

何ゐ空々たる明家あるゆゑ一同呆れて忙然たりしゞ隣家ゐて聞ゞ善兵衛親子ゐ一昨日の朝英吉利の龍動とやらまで往て來るから暫時明店ゐするト斷て出やゑやつたとの答へゐ六日の菖蒲で詮方なく人を馬鹿ゐした奴等だと怒るのみ十六人ゐ氣抜ゞし手持ぶさたゐ引とりけり却説評内五郎左衛門ゐ仕返し來らんとを豫じめ察しける故藤六らと懲せし翌日善兵衛ゐ言て田畑諸道具まで盡く懇意のかたへ預けさせその次の朝千代と共ゐ善兵衛とも引連ひそりゐ此地を出立して江戸ゐ歸り善兵衛親子と知己の家ゐ頼みおき其身ゐ番町の屋敷ゐゞ戻りける

○第三回

善兵衛かつて五郎左衛門ゐ千代ゐ我子あれども花井の刀禰の胤なりと言しゐ善兵衛の妻千代ゞ母ゐ元德川幕府の旗本花井甲斐守の權妻ありしゐ故ありて暇出るとき妊娠居たるを以て出産の子男あらゞゞ我方へ戻せ女あらゞゞ其方ゐて養へとの証書をわたし手當の金さへ與へしと持參ゐ善兵衛ゞ方へ嫁したるあり然れゞ千代ゐ花井甲斐守の胤なると明瞭あれゞ五郎左衛門縁を求めて花井家へその譯を話させ表だち我ゞ妻ゐ娶りたけれゞ親元ゐありて給ゐれと言ひ込せたるゐ甲斐守も覺えゐるとゐて千代ゞ容貌艶麗のみならず孝心深きよしを聞き又坪内五郎左衛門ゐ武藝ゐ長じ取わけ劍法馬術ゐ至りてゐ旗本八万騎の多きも是れが右ゐ出るゐ無しとの譽られ者なれゞ好もしき聟あるを以て遂ゐ五郎左衛門よりの言ひ込と承諾なし千代を我ゞ屋敷へ引きとり名と改めて水掉と呼せ手許へ置て容子を見るゐ聞しよりも諸事たち勝りたるゆゑ好き娘を得ゐけりとて大いゑ悦び五郎左衛門ゞ乞ひゐ任せ黄道吉日を撰み媒妁を以て千代の水掉を坪内家へ送り美々しく婚姻の式とゞ行ひける然れゞ千代の水掉ゐ思ひし男ゐ添のみならず家臣數多やしあゑ家の奥方とかしづりれ父善兵衛も共ゐ屋敷へ引き取られ長屋を貰ひ何不足あく暮しけるゆゑ水掉の方ゐ我身の幸ひを悦ぶゐつけ舅姑ゐ事へて孝行ゐつく五郎左衛門ゐも貞節を盡して


菊川町の馬場
頼朝公沙汰の鎧
考ひ

更ゐ怠りなかりけり然れば五郎左衛門も水掉の方と愛すると益深く比翼連理とい是らのことを言ふふゃ有んと人も羨む程なりき案下再説徳川幕府ゐい亞船浦賀港へ來着せしより此來武術と盛んゐおし士氣を奮起させんとて練兵行軍等の事日々ゐありて懈怠りおりし中よ安政二年の四月中浣麹町三丁目の馬場ゐ於て旗本の壯士集り沙鍋調練と号けし馬上の戰ひを催ふせしりば最珍らしと遠近より見物集り搆柵の外い立錐の地もなき迄ゐて人涙を打嗚したる淵太鼓また吹揚る螺具の響きゐ連て源平の両軍西と東ゐ兵を分ちて備へを立各冠りし面の上ゐ沙鍋を戴き手ゐ竹刀を握り大將たる者を中ゐ取り圍み或ひい後陣となし旱破急を告る螺太鼓の音ゐ足並みださず源平馬を徐々すゝめ稍間近ゐ至り大將度と見て喚かゝれと采打振て下知すれば両軍颯と馬を馳せよせ馳せ違へ大將の頭上の沙鍋うち碎かんと挑みかゝれば脇より是を懸へだて又其者の沙鍋を擊落さんと鬪戰へば滿場忽ち乱軍となり乱れて麈く白赤の旗い咲き分たる躑躅の如く割れて飛ぶ沙鍋い風ゐ散る れよ似たり斯て大將沙鍋と破られれば其隊員と定まりて揚鐙の音ゐつれ引退き勝利を得し隊い徐々場中と一巡りなし鬨と揚て退て行くその勢ひ凛々として又無き看物ゐれば江戸市中一般の大評判とい成ゐけり然れば沙鍋調練日々盛んよなり壯士おひ〳〵集る群中ゐ坪内五郎左衛門大草灘次郎の両名い馬術擊劍ともゐ卓越なるを以て是ゞ右ゐ出る者なきゆゑ何時も一方の大將ゐて坪内源軍の將たる日い大草平軍の將となり龍虎の雌雄を爭そひしかば果い女の見物まで出て誰い上手是い男ゞ美麗なぞ言ひとやすを聞て利ゐ走る狡賈い坪内等の紋を簪ゐ彫りて賣いだす程なる故見ゐ集りし男らも右方左方贔負を稱呼遂ゐ勝敗を賭となし爭ひを起すも少なからざりしとなん爰ゐまた五郎左衛門ゞ友ゐ齋藤柵次郎山田我次郎古石與七郎あんぞ言る有りしゞ沙鍋調練の戻りゞけ源平の勝負よりも猶遙うゐ面白きとあり馬も供人も皆かへし我々も然する程ゐ忍びて一人徃給へと勸め五郎左衛門を誘ひて麹町三丁

目ゐ住む辨慶吉と仮名する者の家ゐ到れり辨慶吉ハ五郎左衛門と見て恂りなし刀禰ハ前年足利在ゐて梁田の藤六などを懲し給ひし方ゐわちずや我ちハ其際酒樽擔ひて善兵衛許往し者なるゲ取るゐ足らぬ彼らの子分ゐてあらんを厭ひ其後長脇差仲間と脱し去年の秋より此處ゐ在て齋藤山田古石の刀禰の汚最負かうふり辛い浮世を遊んで送る一徳者と話すを聞て五郎左衛門實ゐ武者修行せしをり然る事もありしゲ今と成てハ一睡の夢の思ひせりゐど答へ朋友の前を兼れバ詞少ゐゐ言流せり齋藤山田ら二階を頤でさせバ辨慶吉が誰も居らぬとゐ齋藤立て去來きませと僉々諸ども五郎左衛門を二階へ伴へり抑この二階ハ博奕の常賭場なるゆゑ中央ゐ盆莞莚を敷箋壺皿なども備へてあり席主の吉ゲ莞莚の周圍へ座蒲團を程よく配れバ五郎左衛門をも勧め各これゐ座を占たり時ゐ山田我次郎ハ五郎左衛門ゐ對ひ日本ゐてハ嚴しく禁止するといへども賭博の遊びハ各國ともゐ在と聞りト言ゐゲら箋三箇を採り莞莚へ轉ゲし是ハ一一四と出たり一を兩方よゐき四を中ゐ据れバ二人の坊主ゲ巨燵ゐ温れるの樣ゐり依て是をゐ寺の巨燵といふ又一一三と出れバ鍛冶屋の曉天と呼ぶ鉄を伸すが如き音ゐる故ゐり又一二六と出れバ日蔭の物干と号く六二一との意なり鯛平目の上品より下等の河豚の美呼ゲ勝れる先我々ゲ爲るを見給へとて猶兩三名をよび迎へ山田古石齋藤など黄金白銀ゐき並べ賭博を始めたりけれゼ五郎左衛門も是ハ面白しとて其仲間入して手と出せしゲ悪と引出す元となり自已ハ勿論數多の人の命を失ふ災害とこそ成ゐけれ嗚呼五郎左衛門ハ馬術劍法卓越ゐして此道ゐ掛てハ實よ當世の英雄ゐて膽の強なるゐ又万人ゐ勝れたり且其身幕府の旗本ゐ在りて父伊豫守祿高多けれバ數多の家臣を養ひ金銀ゐ乏しからざるを纔の賭事ゐ沈り人を殺して其財を奪ふなどの行ひゐ至りしハ所謂大膽小志ゐるものゐやゐちん爾る程ゐ坪内五郎左衛門ハ悪友らゲ勧めゐ覺えし賭博の遊びを此上なき快樂となし吉ゲ家ゐのみ這入り込みしゥバ後ゐハ古石齋藤山田ゐも増し博徒とな

りたりけれど奥方水掉を始め父伊孫守さへ未だ心つうず因て世間の人ハ猶さら是を知らざるゆ此程幕府へ召出されぼ番士のうちへ加えられたり然れども五郎左衛門ハ悦ばず愈賭博ゐ身を入れたるゆ一夜五郎左衛門と始め齋藤山田古石など僉うち負され自狂酒の酔ゐ助けられ打連だちて歸る途中四ッ谷門そとの堀端ゐて呉服商の手代ゐやと思ふ若者ゐ出あひしゐ怖して遣らんとて齋藤古石戯むれゐ刀を抜き白刃を星ゐ晃々りして。コレ待と聲掛たるゐ件の若者大ゐ駭き懐中の紙入取つて擲ちさま雲を霞と逃ゆきけり坪内山田手を拍つ偖も臆病ゐる奴かなと興じ笑へバ古石ハ投し紙入拾ひ取り仮初の戯れでも袖口切れバ無税ハせぬ手數料ハゐ心もち先本尊の開帳せんと戯談ゐゆゆら開きて見るゐ金ハ小粒で十両ゐまり有けるゆゑ是ハ面白き遊びなりと此處ゐ眼を暗紛れ酔ゐ乗せし戯事より計らず得たる金を手早く配分して其夜わかれ〳〵となり各屋敷へ歸りゐけり是や五郎左衛門および山田齋藤古石等ゆ悪事と爲すの始めゐて是より折々暗夜と窺ゆひ善國寺谷の道邊ゐ潜み往來の人を却かし金錢衣類を奇ひとる事數回なりしも阿漕ゆ浦の故事ゐならねど度重なれバ人や知らん巣を變所を轉じて各の懐中ゆ温もる程ゐ働きゐさんと五郎左衛門の發意ゐ僉同意し然らバ斯々なすぞ好からめとて竊ゐその謀計を語らひぬ此頃麹町三丁目の角ゐ於てつ牡丹餅とて名高き店ゐりしゆ沙鍋調練盛んなるゆ爲ゐ見物の者また坪内らの人々まで多くハ當店へ憩ひける故日ゐ〳〵繁昌して牡丹餅の賣高少なからず今宵も亭主銀兵衛ハ賣御の金錢を數へ終り先や眠りゐ着なんと門の戸鎖をゐす折しも表ゐ人ありて聲高く地主より急用ゐれバ開よ〳〵と戸を敲くを銀兵衛ハ訝しみ夜中なんらの用ぞと問ひながら開く入口躍り入る曲漢四名手ゐ〳〵刃を的眼りし銀兵衛を押取りまき胸へ切先さし附て。ヤイ亭主掛ゆへ持ぬ命ゆ惜くバ掛ゆへ出來る有金殘らず浚つて出せ彼是言バ刀の錆と罵る側から又一人ゆ濁聲あらくサア返答ハぞヽ何様だと白刃を疊へ禹煞と突き立て覆面頭巾の間から

目を光らせて睨み附れば銀兵衛ハ歯の根もあはぬ震へ聲あて見給ふ如く其日〳〵餅飯あそへ鬻ぐ茶あ立る煙の細元手須磨てふ浦あ燒く塩のから く世渡りする家へ有金あぞとハ浮眼違ひで恐れ入ります何卒是あて浮勘辨と二両餘りの金取り出し是とて資本あ響くあれど空手あてハ歸り給ハじと言せも果ず冷笑ひ口賢くも言ひ拔たりあ日毎々々の調練あて客の山あす繁昌を誰ゞ金なしとて免さんやト言ッヽ白刃を取直すそのとき一人ゞ又側から二両計りの塵芥金で野鼠〳〵歸る我等あ非ず隨意あ持て行く狀を隅あ縮んで見物せよと言ひッヽ彼方此方搔き探し賣溜の入物見つけ額銀二朱金握み出し。コレ見よ瞬あ埋たる糞桶の屎ほど溜てある金を猫の糞あて土を掛け屁ほどな金で追ひ拂とんとせし惡い仕方の償ひあ命を取るべき筈あれど又溜させる稲あして置と尻目あ掛々彼の金を名々袂へ握み入るを最前よりして鬪爭うと窺ひ居たりし銀兵衛の妻ハ漸く賊と去り徐と厨房へ這ひ出て盜賊入りたり盜賊と聲を限りュ叫びあがら銅盥とつて叩き立れバ盜人ハ驚き狼狽戸障子蹴やぶり走り出逃足あ任せて逃げ去りけり是あん坪内五郎左衛門等の四名なれども誰かハ夫ぞと悟り得べき其翌日も調練はてたる後坪内等ハ例の通り於てつ牡丹餅ある銀兵衛の店へ休み妻の出す茶と取りながら先刻の程噂あ聞しが盜賊當家へ入りしよし實說なるゥ虛說うと問バ銀兵衛帳場の裡より會釋して。イヤ虛話あハハはず昨夜亥の刻過るころあや有りけん地主からの急用と言ハ怪しと思ひあゲら少焉も置ず門の戸を引開る間も荒し男ゞ四人まで入り取り圍み白刃を鼻へ突つけて攻め立られる怖ろしさ妻ゞ如斯々々做せしあ依り幸ひと賣溜あ些の金ハ殘したれども半數ハ失て翅扱れし飼鳥の飛。イヤ飛だ目大痛事あ遇ひましたと苦笑ひして物語るを古石山田顔見合せ夫ハまだ宵の内なるあ偖も〳〵物騷千ゞん思ふあ遠くより來りし賊あていハ有まじ併し金でハ迎も出まい以來夜中ハ心を用ひられよ抔信切らしく慰さむるうち坪内ハ懷中より金子を出して紙あ包み夫ハ怪うる災難あて有し然れど命

有ての物種なれバ怪我の無のが何より重疊悪き事の來りし後ハ又善とも車の世の中廻り持ある金ゐしあれバ忽地戻りて來るべし然のみゐ思ひ屈しぞとて件の金を僅少ながらと與ふると元ハ已ゞ物ゐりと神ならぬ身の知る由無れバ請頂きて妻とも〳〵打悦て銀兵衛が蛙形さまを見るゐさへ可笑き笑ひを咳ゐ紛らし後邊と向きて密と吐し舌の劍ぞ恐しゥりける

○第四回

此所ハ半藏門外人足稀なる堀端を夜更ぬうちと氣ハ急ぞ六十年を越し老人の歩行ハさらゐ不神速やうやく馬場ゐ近づく折から顯れ出たる曲者ハ別人ならず坪内山田の人々ゐて等しく刀を拔放し。コリヤ待汝この道を通らんとなら手ゐ持る包ハ物かハ擧身ぬいで置て往〳〵と言ゥ〳〵古石飛ゥ〳〵り老人が手ゐ持たりし包みを奪ひ取んとすれバ老人震へ戰慄ゐがらも包みを確と押へて放さず。ア、是旦那樣この包の中ハ襤褸切でゆゑ座りますと言へども聽ず古石が突轉がして奪ひ揚げ開いて見れバ反物二反金さへ少計有りけるゆゑ古石山田聲あらゝげ反物を襤褸と僞るくらゐでハ何樣やら脈の有げゐ奴。ヤヨ齋藤氏此奴の懷中と驗め給へと言も終ぬゐ柵次郎白刀提げ立はだかり。ヤイ老耄懷中の財布を出せ。イヱ其樣ゐ物ハ一ツ無と具陳ぞ此紐ハと袗首よりして引き出す其手ゐ確と縋りつき何をゐ隱しゥしませう老性ハ麹町二丁目ゐ住む鳶人足桑本の丹吉ゞ父、丹藏と呼るゝ者先つ年仕合せ惡く貧ゐ迫りて年の瀬ゐ積り〳〵し借錢の淵の深みを越かぬれバ是非も泣く〳〵妹娘を柳橋の藝妓とゐし弓を張たる提灯ゐ火の降る攻苦ハ薄らぎし煙も細々立續くハ娘の蔭と思ふゆゑ今宵も柳橋へ參りし戻りゐれバ懷中の金も包ゐありし金も娘ゞ骨とりで貢ぐ金是を旦那方ゐ差上てハ親子ゞ飢餓ゐ迫りまず又その反物ハ拙老と丹吉とゐ苦しき中での贈與物いまそれを献上てハ娘ゞ盡す孝養の辛苦も水の阿波縮泡より脆い老ゞ身を憐れと思し給ハりて。モシ旦那方どうぞゐ慈悲ゐゐ見除し下さりませト泪ゐ霞む目を拭ひ三輪の絡車繰返し〳〵てハ歎けども五郎左衛門空囮

き娘ゞ孝心あつきとて我等の爲ゐ何ゐうせん時や移らめ古石氏ソレとの指揮ゐ古石齋藤立かゝりッゝ懷中の財布と奪ひ取んとすれど確乎と抱きて放さねばエゝ面倒なと切付る白刃の下ゐ憐むべし肩先四五寸擘られ苦とばかり玉消る聲ゐ坪内い舌うち鳴して白眼つけ。アナ噪々し人もや聞んと早く息の音止め給へと苛立詞ゐ山田我次郎止めを刺んと乘かゝる白刃を握みて怨恨氣ゐ半藏外の堀端い書さへ寂しい處ゐる故縱令遠くも賑ゐな道と通りて往給へと言し娘の一言ゞ耳ゐ殘りて有なれど貰ひし金と反物と早く悴ゐ見せたさゐ老の心の急ゞれしい我ゐら冥途の導きせしぞと思へば〳〵朽惜しと眼を睹張り齒を噛去ばる。今際の苦痛物ゐ言ぞと我次郎ゞ力と極め突及ゐ出る血汐と引く呼吸さへ絶て黄泉の人となりたり漸く成佛さて百ヶ日の仕切りいと財布引出し重みを量り思ひの外の目方だと莞爾去ゐゞら坪内らゐ渡せば此處ゐ長居い危嶮し例の所で配分せんと應へッ死骸の袖引き裂き刀の血を拭ふ折しも櫻田の方より下男ゐ提灯照ら

させつ來かゝりたりし一人の侍士今坪内らゞ鞘ゐ納る刀の光りの的歷と見ゆれゞ是ゝ曲者ゝと足を止めて行途を窺ふ此方も夫と礫を拾ひ曳と一聲打つくれゞ磯乎音して提灯の燈ゝ消て主從ゞ愕然うちゐ坪内らゝ行方も知れず成たりけり後ゐ侍士眉皺め偖こそ彼奴らゝ曲漢なれ刀の光り晃然しゝ人を殺めし者よやあらん行途ゐ心を附て見よと吩咐られて下男ゝ怖々星の光りゐ四邊見まゝし行と未だ幾何ならず果して一人の老翁ゞ血よ染りて倒れ居たれゞ下僕ゝ恟り。ヤア刀禰こゝゐ倒れてと邻行すれゞ侍士星の光りゐ透し然れゞこそ思ひしゐ違ゝざりけれと差添ゐ結し火打袋より火道具取り出し火を打つけて提灯点し死体を見れば六十餘りの老人なるゆゑ噫嘻傷ましと引き起し疵口とつくと改め見て身体冷氣脈まつた く絶たれゞ迚も生べき者ならず然るゐても今一足早かりせゞ助る工夫も有りたらんゐと溜息吐ッゝ放す手の間近ゐ暉晃る物有るゐゞ取り揚見れゞ小柄ゐり侍士思ゝず膝を叩き是ゝ好き物ゞ手ゐ入りし必常曲者の落せしならんと提灯の火ゐさし寄せ暫時ためつ眇つなし祐乘ゞ作の金龍の高彫ゝもしやと思案の首かたむけ腕拱きて默然たる時月ゝ雲間ゐ顯れたり所へ向ふの方より話しの聲も喧しく足を早めて來かゝりたる七人餘りの一連ゝ麹町の鳶人足ゐて仕事さきの斯く計り遲くゐりたる事ゐらねゞ提灯の用意もゐきを月のゐ蔭で大助りと言ゞ一人ゞ聞咎め家へ漸く一と跨ぎ戸口へ足の届くころ出るとゝ餘り氣の利ぬゐ月さまだと私語ゞ氣の利ぬのゝ當然まだ年や若い十三七ッ了簡去やれと打笑ふゐ他の者らも僉笑ひ動搖めき來る堀端ゐ立ッゝ思案の侍士を一人の男眼速く見て平澤さまゐ在さずやと問ゞ侍士振り顧り。オゝ三吉ゝ今如此々々の事件ゐり惡人ばらを取調る手掛りもやと往も得かねて居れるなりト要を摘み言急しく物語り死骸を示せゞ驚く人々誰ゐや有ん若し知る人ゐゝゐらざるうと差し寄り覗きて一人ゞ駭然。ヤゝ是や頭の親父樣と聞て一人も貌見人れ成はど左樣だと騷ぎ立ゐ平澤もまた愕き何頭とゝ丹吉のとゞ然容で涉座ります

月頃日頃お出入りの丹吉が親父の丹藏とやすもの是りや此事を報道たなら孝行深い丹吉どの何程歎くであらう嗚呼死なせしと心有るも心無きも歎息の外詞なし平澤も吐息つき彼ゞ悲みも思ひやられぬ丹吉おゝ見せたら無死骸なれども隱して計らふべき事なら誰ゝ早く呼て來よ竊お告知らす事ありと云お我こそ往て來らめとて二人三人丹吉の家さして馳行たりしゞ間もなく飛で來たりし丹吉父の死骸見ると齊しく血汐も厭ゝず縋りつき搖動りして前後不覺お泣哀しめる其樣ゝ火水へも躍り入る常の强氣お似もやらず心優しく見えたりけり斯てゝ果じと平澤勢之丞言葉を盡して諫めたりしかゞ丹吉涙を押拭ひ父の横死お心みだれ未だ慇禮もヤし述さりき今宵ゝいたく陰と蒙り恩深くこそ覺え奉りぬ付て父を手お掛殺したる曲者ゝ如何なる奴ゝ知し召れ給ゝずやと問ゞ平澤手を以て丹吉を膝下へ招き無念さこそと推量せりト言ッヽ聲を低くして曲漢ゝ正しく四人と認めたれど間隔りたれゞ顔ゝ定りお知れざりし然れども丹藏ゞ死骸の傍らお端なく小柄を拾ひたり我この小柄お覺えありて持主ゝ知りたれど浮と人ゝ疑ゞれず併その持主ゝと丹吉が耳へ口を寄せ何やら密話きりすれゞ丹吉ゝ涙のうちお肘と張り哀しき中お歡びの色また見えて点頭耳へ人の無常を悟れとゝ告來る鐘ゝ天龍院ゝ八幡なるゝ定おき夜ゝ子刻とぞなりぬける却說坪内五郎左衛門ゝ武者修行せし頃の心どゝ打て變り斯る暴惡おる業を以て快樂となし夜お入れゞ邸と抜出て人を强迫し奪ひたる財を博奕酒色の料となし又剝とる衣服手道具などゝ彼の賭博の常宿とする弁慶吉お賣り捌りせ齋藤山田古石らと此家お集會り計る惡業いよ〳〵長じ終お糸本丹藏を殺したりけれゞ市街の噂淺々と高くなり其事坪内らゞ耳へ入るゆゑ斯てゝ其役より廷捕あるべし暫時潛み居らざれゞ危ふからんと示し合せ夫より盗賊の業ゝ絶ち弁慶吉ゞ家お集ひ賭博を行ふのみなりけり前話休題坪内五郎左衛門の内室水掉ゝ思ひ掛なきとより五郎左衛門お擧られ多くの女中お敬ひ傅うれる身とおり如何お

る過去の善根ありて斯る幸福ゐ遇るやと悦ぶつけ舅姑ゐ孝を盡し夫を敬ふと厚かりしが五郎左衛門の氣質ただいゐ變り荒々しく成のみならず先頃より夜ゐ殊さら家ゐあらねば怪しみゐ堪ず人をして是を探らたむるゐ博奕を行ふとの事ゆゑ最々胸を痛め一日用人藤島瀧之進が用事ありて我が子舎ゐ來りしを僥倖と呼近づけ汝ゐ家の老臣ゐて諸事ゐ心を用ゆれば定めし知りたるならんが近頃の刀禰が御行跡心得がたき事のみあらずやと問ければ藤島膝を進め實ゐ意の如く若殿ゐ最恐れ多き慰みを遊ばさるゝとの由を聞り臣等ゐ深き恩の下ゐ安んずる身あれば謁見毎ゐ怒りを顧みず諫め奉つれど兎の毛の末ゐ置くと云ふ露斗りも用ひ給はず倍乱るゐん行ひ只々胸を痛めゐのみ恐れながら武術且つ騎戰ゐおいて乘ゐ秀て双ぶ者なく剩へ何一ッ不足あらぬ身でありながら慰み事を變へ賤しき者だゐ忌嫌ふ所業を好ませ給へるゐ本心と思われ天魔の所爲ゐや歎きても猶餘りあると憚り無く述るゐぞ奥方水掉ゐ愁然たりしが若し此事の公ゐ聞ゆるときゐ咎めを蒙るばかりで無く家の瑕瑾父上さまの恥辱なれば汝今一度諫てよ若し改心あらんゐ他も夫とゐ未知るまじ然ればとて猶ゐん聞入れ無き時ハと計りゐて唾呑み込つ口隱るを瀧之進ゐ慰めかね痛いしとばかりゐて落す涙の玉櫛笥忠貞ゐ道ゐ隔つれど同じ思ひの奥方水掉も堪ずや其處ゐ伏し沈む後方のかたゐ咳して隔ての唐紙押開き坪内伊豫守徐々と上座ゐつけば水掉ゐ驚き後邊へ急ぎ身を辷らせるを否然して居よと押止め藤島を顧み今厠よりの歸るさ端無く聞し密談ゐ五郎左衛門が身の上夫を思ひ主を思ふ汝等が赤情然も有ゐんと感ゐ堪たり水掉の心配ゐ理りゐれども今と成て見れば諫と用ひ改心すべき者ゐ非ず然ればとて我家より罪人を出すゐ先祖への恐れ此身の恥辱ゐ水掉の言る如くなり然れば寧我手ゐ掛て打捨んかと思ふものから老の腕詮なくて一日々々を過すのみ何ゐ附ても不便あゐ汝ぞと目を屢叩き歎息するゐ奥方水掉も瀧之進も等じく其處へ平伏して果し涙

を吳羽鳥頭を擡げ得ざりけり

○第五回

不題三番町の屋敷を搆え祿高五百石を領す山田主計と云るゝ我次郎の父、なるが豫て我次郎の乱行を歎き數回説き諭すと雖も我次郎ゝ馬耳東風悔る色さらゝ無れゝ主計へも今ゝ是迄でなり遲々して事露顯せゝ家の瑕瑾と胸を定め我次郎が常の如く泥酔なし酒の香を芬々とさせ歸るを見て主計ゝ特ゝ機嫌よく汝ゝ未だ知らざるや喜はしき報ありと言ゝ我次郎訝り夫ゝ何事ゝやと膝と寄れゝ主計へ莞爾と笑ひ今城中より報知ありて今宵イヤ明日ゝ汝の役儀一段昇進なせりとの事ト聞て悅こゝ我次郎の顏を見るさへ憂はしく小膝を正して主計ゝ進み。ヤヨ我次郎夫ゝ付ても人の上たる役儀仰せ付られなゝ謹んて曲りし道ゝ行ぞ迷ひな子を見るゝ親ゝ如ず汝生來正しきを好み孝と忠との心厚し然れども朋友ゝ惡事を好む奴ゝ曲れる方へ導うるゝやも料られず縱令塵ほどの惡を犯し他ゝ知らじと念ふとも暗き處ゝ神明あり明るき處ゝ王法あり空曠くして隅無きも天の網また大いなれゝ如何で是ゝ罹らざらんや惡ゝ身を亡す基嗚呼謹むべし戒むべしイヤサ汝ゝ左樣の者ならず親ゝ心痛さする抔の事ゝ有まじ致しゝまし只戒めゝ言ひ聞せ置なれゝ胸ゝ收めて忘るゝなと涙隱しッ外件ゝ罪の次第を言ひ聞するゝぞ我次郎膽を刺るゝ如く手を拱きしまゝ默然たり主計へゝゝと打笑ひ目出度し喜ばし先前祝ひの盃せんと酒を命じて汲交す銚子の數の積りけれゝ醉ゝ貌ゝて知るゝとも色ゝ出さぬ武士が是や別れの盃と後ゝぞ思ひ泡雪の消ゝ行ある我次郎が我子舍さして立背面を主計へゝ去ばし打眺め吐息吻ッゝ是もまた奥の座敷へ落照の鐘ゝ花ちる逢魔どき何の心も中庭の座敷ゝ獨我次郎ゝ今日の賭博ゝ勝て得し金を算へて居る折しも表の方ゝ人影するゆゑ誰ゝや有んと見やる隔ての障子越し的歷と突出す鎗の穗先ゝ横腹深く貫ぬゝれ重手ゝれども屈せぬ我次郎鎗の拐確と左手ゝ掴み右手ゝ刀を拔よと見る間ゝ鎗の拐丁と切て放し聲振た

て丶曲者あり人々出よと呼んりさま障子を瓦破と引開れば人の氣更ゐゐらざる故不思議と猶も見まゐす後方へ來る主計ゐ苦しき息つきアナ迂かりし父上よ只今何奴ゥ障子越しゐ斯の如く疵を負せり遠くゐ行に討止て と云さへ弱る斷末間主計ゐ見やり眼を數瞬き其曲者ゐ別人ならず主計ゐ り子を父ゲ手ゐ掛て殺す仔細ゐ云ずと胸ゐ覺えあらん武士たる身ゐ有る まじき綠林追剝の群ゐ入り惡事を行ふを我疾より宜く知りぬ亦去る夜汝ゲ刀を竊ゐ改め見たるところ人と殺しと覺しくて刀の所々ゐ摺と生じ柄糸ゐ血の汚れゐり然るを以て考ふる時ゐ半藏御門外ゐ於て殺害されたる老人ゐ汝らの所爲ゐ相違なゥらめ。サ丶如何ぞやよゥ言解ゐ有るまいと膝立直し眼ゐ潤む涙見せじと押拭ひ我始めより斯らんとゐ成うゥと思ひしゆゑ言を盡して諭せども空吹く風と聽流して倍惡事募るゐつけ捨置て露顯せば家の耻辱と止を得ず前の程祝ひゐ言寄せ酌交したる酒ゐ末期の水入らず親子決別の盃と思ひ合すや悟らずや疊の上ゐ死を遂るゐ汝ゲ身ゐゐ不勝の幸福勸念せよと罵り示も言葉ゐ猛く聞えても不愍いや增す親子の情さすが歎きゐ堪かねッ丶顔を反けて太息つく〳〵。我次郎こ丶ゐ過失を悔けん刀を投捨て噫誤りぬ過ちぬ實ゐ父上の宜ふ如く月でろ日でろ惡事のさま〳〵半藏門外ゐて老人を殺害おせしも拙子の爲すところなり首ゐ素より無き身ゐて爺の槍ゐ死を遂るゐ願ふとも得難き幸福先刻の戒めゐ冥途へ趣く好き引導今日より惡心と飄へし百年の後ゆ渡りある爺母を彌陀の國ゐ待ち奉り孝養盡しゐはん早ゐん暇と槍の柄を兩手ゐ握つて突んとする際。ヤヨヤ、待てと走り入るゐ別人あらず主計の奥方遠波ゐて投るゲ如く身ゲ寄て手負の側ゐ轉びゐし聲も涙ゐ涌きかへる胸を拍ち胸を打ち暫時くして目を拭ひ。ヤヨ我次郎苦しからん切なゥらん痛はしや母ぞかし遠波ゐ侍り天ゐも地ゐも樫實の只一粒の汝をば親ゲ手づから失ふとゐ如何ある因果ぞ前つ世ゐ作りし罪の業報ならん其方ゲ生たつ今迄ゐ幾そ何そ心盡しも他事無くて生出る日を力草絶らまくせし綱さ

へも斷て頼みゝ奈摩與美の甲斐無き時ゐ改たむる心ゞ有らゞ何故とくゐ其詞をゞ聞せて呉ぬ怒死る末期となり草葉の蔭ゐ待て居て孝行するとゝ何事ぞ死ざる前ゐ逆まな手向の氷の露はぞも氣ゞ附て呉たゐら何とて苛く殺もべき怨めしの我子やと前後不覺ゐ搔き苦說おなじ思ひゐ主計も堪得ぬ其悲しさを嚙ばり奥ョ左程ゐ歎きなせぞと言つゝ涙おし拭ひ形体を正して手負ゐ對ひ出りしたり我次郎我子なりけり我次郎人の將ゐ死おんとする時其言事やよし仮令末期の際なりとも改心するとの一言ゝ惡ゐ强き善ゐも强き氣性あらはれ思ひしゐ增し喜ばし然らゞ此世の暇を取ら し後世安樂ゐ去て遣んと刀引拔き我次郎ゞ後方ゐ龍鐘立まはれゞ我次郎心得首を伸す覺悟ゐさすゞ氣後れし切るゐ切られぬ恩愛のきづなゝ腕ゐ絆はりて乱るゝ太刀と心とゐ少焉躊躇ふ耳元近く亥割の時計の鳴渡れゞ時や移らん宥豫するはぞ苦痛多しと取直したる刀の光りゐはやと見る間ゐ我次郎ゞ首ゝ前ゐぞ遠波の方ハッと斗りゐ泣沈み正体あらぬも道理と主計ゝ床の花瓶とり刀へ滝ゞ水よりも瀧なす涙止めかね共ゐ悲歎ゐ呉たりけり

○第六回

一條の大道ゐ等き堂々たる長廊下を遷綿として挾みたる部屋々々と數れども指ゐ餘り眺れども眼の及ばざるゝ名ゐ負ふ大江戸の城中として肩衣袴の折目正しく品格嚴然と威を示し世の景況ゝ先知らず悠々として最靜やうなる表役々の部屋ゐ引きかへ騷ゞしゝるゝ御番士の部屋ゐして浮世談話諸士の善惡差料の刀の切味劍鎗弓馬の術の巧拙など斯此と論じあふ中ゐ甲士四邊を見まゝし今日も又山田が出勤せぬゝ例の懈怠なるか困つた男と私語けゞ乙士が手を打ち忘れたり其事いまだ諸士も知らでや在さん山田ゝ昨夜父の手ゐ罹り黄泉へ旅立なしたりとの事人ゝ外粧ゐ倚らぬと云ゞ實ゐ彼ゝ武士たる身ゐ相應らざる博奕ゝ棄鐘のうちゐ數へ剪徑强談盜賊など惡き限りを爲せし故とぞ拙者ゝ今朝その届書を見て詳ゐ知

りたり然るが爲ゐ主計の弟へ家督相續致さすよしと話すと聞て衆士それいと驚く中ゐ坪内古石も詰合せ居り愕然去たれど心の内ゐて舌と出し坪内い然り氣なく實ゐ料られぬ人心驚くべし恐るべし併し山田氏一人の業ふい有るまじからん然れば同類三四人ありとあれど捕縛官の手ゐ掛らぬゆゑ先い我次郎一人の脊負ゐみ「否々石川長範熊坂五右衛門でも他の物を只取て後脊へ手の繞らぬ例い無其同類も頓て閻魔の御厄介呵嘖の鬼のお手數でがな御坐らうと面前居る坪内古石を知らぬが戯氣無多口雜りゐ物語る折しも一人走せ來り甲某乙某ゐ用ぞとゐ應と答へて刀引さげ皆々部屋を出行きけり跡ゐ殘りし坪内古石顔見合して聲を竊め我次郎既ゐ死せるあら万事を彼ゐ負するゆゑ一寸の都合い好い樣あれど若内幕を漏せしなら恐るべきい主計なり「否夫よりい半藏ゐ門外の際秘藏の小柄を失へり彼の小柄の金龍い祐乘の作ゐて人も知りたる物ゆゑ若し同役らが目ゐ觸れゐ老人と西の國へ拂然と遣たい小子と監定附るゐ必定」夫い去なしたり

坪内氏ふい心附ざりしゅ彼の折り來りし箱提灯の紋所い平澤ならんと思はれたり若し彼奴ふ拾はれてい「油斷あらぬが顏色變る程でも無い元より他ふ證據の無き事自已の口から言さへせねば露見の仕やういい決して無と二人い首を一ッよ寄せ密々話しふ餘念なし實や陽震が四知の戒め壁ふも耳の無らんや最前より立聞したる侍士が忍び足して去る影を夫と見止て古石仰天彼い平澤勢之丞大事を聞れてい生て置ず先一討と身を起すと此所い殿中早まり給ひぞト押し止めッゝ坪内が古石の耳ふ口寄せ雲時呵き聞すなる巧い何と白眞弓張る臂も氣も折れたる顏ふて然あり然ありと與七郎胸撫下て居たりけり却說坪内家の用人藤嶋瀧之進ふ二人の男子ふ長男武志い父ふ似ず大怛不敵の性質なれば五郎左衞門の惡業を快しとし常ふ之と羽翼て愛せられ次男室之助い父ふ似て沈略の生立なれば五郎左衞門惡んで近づけざるい同氣相求め同病相憐れむの所謂か然れば坪内五郎左衞門い殿中より退出すると其儘武志を人なき所へ呼び今日詰塲ふて古石と密談なしゝを平澤ふ聞れたる事を物語り斯る譯あれば勢之丞を生置がたし然るゑ彼奴今日い退出より三番町へ寄る由あれば歸りい必定夜ふ入るべし彼が屋敷い麹町なるゆゑ戻りの道い善國寺谷の外なし汝今より彼處ふ往て待伏なし不意ふ起つて闘討ふせば彼劍術ふ長たるも其方も亦腕前あれば宿鳥を刺すが如くならん仕遂たあら賞與い莫大よく此事を爲るやと云へば武志異儀なく承諾て命掛の御用なれども君の大事ふい替がたし勉めて致しいん然らば親ふ用と言附られぬうち早く家と出かけ麹町の吉が許ふ忍んで時刻來ると待よゝし搆へて人ふ悟られなと戒めたる後手簞笥より金一包み取り出し脇差ふ添與ふれば武志い請て押し戴き斯ぶ刀まで頂戴いたす上からい彼奴の命い早無きもの御心易く思し給へと廣言はき其座を去んと爲るところへ是も又立聞されしを氣遣ひ猶坪内ふ相談せんとして出來りたる古石與七郎が闘討の手術をいよゝ行ふと聞き平澤い双ぶ者なき撃劍家不意ふ起ッて打ふもせよ一人ふてい危ふしと思

ふゆゑ力を添ん心ゐて來りしゐりと言を聞き坪内い大いゐ喜び古石殿の助太刀あらバ鬼ゐ鉄棒持せしよりも猶丈夫四割の堂をとるより確乎と打笑へバ古石二三度腕を撫下げ白髪まじりの首を切り一轉しゐ去て遣んと是も笑ひて別れを告げ出るを霎時と武志ゞ呼び止め拙郎い家ゐ歸り仕度して直さま參るべきなれバ一足お先へ「オヽ吉ゞ家ゐ待て居るぞト示し合せて歸り往く武志い家ゐ立戻り身拵へゐし先や往んと奥の間の戸引きあけ立出る出合頭ゐ室之助端ゐく見止め訝り思へバ兄上ゐい常と變りし氣色のみゐ事ありげなる扮形裝何處へゐ往き給ふト問れて少し差詰りしゞ柔術の夜藝古ゐるゆゑ行なりト言ひ諒むれバ室之助進みより今日い柔術の休み日何とて夜藝古ゐはんや賢氣ゐヤすい最も鳥滸なれど主ゐ道ゐらぬ行ひあれバ諌るゞ言ずと知れた臣の道然るを兄上ゐい若刀禰と共ゐ博奕を爲し給ふと聞く柔術とい僞り其を弄びゐ行き給ふならめ否々何とて然る業を爲んやト言放ち往んとするを室之助ゐは引き止めて支るゐぞ武志苛立こしやくな奴と言ひゐゞら後方ざまゐ蹴放てバ不意を打れて室之助ゐりへゐ嚔と倒るを顧もせず庭へ霏良哩と飛び下り門の戸口へ手を掛て悪事もてゝゐ麹町辨慶吉の家よりして善國寺谷へと走せ去りけり月を蔽べる簇雲い墨を流すゞ如くなりしが忽ち降り來る驟雨の勢ひ沛然としして荒冷小溝溢れて時の間ゐ大道川を爲せしかバ往來の人も絶えたりしゞ少焉ゐして小降と成たり此時平澤勢之烝い所用ありて退出掛立寄りし方ゐ在りたるゆゑ暇と告て只一人小提灯ゐ道を照し我家をさして來りゝりしい晝さへ寂しき善國寺谷今うゝと松影ゐ身を潜ませし古石藤嶋濡たる衣を絞り揚つゝ右左より躍り出て切て掛れバ平澤い驚きながら兎毛露騒ゞず右ゐ閃爍く古石の白刃を傘ゐ受流し左より來る藤嶋の刃を外し身を轉せバ左手ゐ提し提灯の燈火い消て烏羽玉の闇といあれど雲間ゐ透し苛つて切り込む二人の敵を受つ外しつゐしらへゞ刀い扳ぬ勢之烝薄疵負しゞ物ともせず精神ます〳〵加りて只一本の傘ゐて挑み戰ふ手練の逸

業古石藤嶋力を尽せど討も得ず腕乱れ足元倭僃て息を切るのみ左右する間ゐ空晴て月の光りの赫然たるゐ便宜と得たる藤嶋武志氣を勵まして切込むを平澤閃爍と身を引ゞ今古石ゞ進みよる肩先をたゝゝ斫り下るゑ古石アッと聲を立後方へ倒れたり。コハ同士討と藤嶋ゞ呆るゝ間を平澤得たりと鯨の如き傘で面骨碎乎と打けれゞ湧出る涙ゐ眼くらませ逡巡武志の右腕掴み投げ飛したる白打の精妙武志ゝ腰を跛させ起も得ざるを取て押へ顔ゐ蔽ひし手拭搔ぐり大いゐ驚ろき。アナ曲者ゝ常ゐ見知れる坪内殿の若侍藤嶋ゐてありけるよ何とて我を狙ひしぞ心得難し仔細を聞んと詰り問ゞ藤嶋太き息を吐き人ゐ頼まれ古石殿と申し合せ刀禰を討んと爲したるも斯く成上ゝ是非ゐ及むす仔細ゝ言ずと察し給はん此上ゝ只彷成敗願ふとばかり眼を閉て再び唇を動らさず平澤ゝ冷笑ひしのみ深くも聞ず刀の下緒扱き取武志を嚴しく綁縛めて傍の木へ繋ぎ附け又古石ゞ衫首を握んで其儘引き起せゞ眼を見開き平澤を睨みたるまゝ呼吸絶けり思ひの外の深疵死したりしゝ殘念と獨語しつ点頭て古石の懐中へ手を入れ搔探れゞ果して一通の書狀ありしを上書のみ見て莞爾と笑み我ゞ懐中へ入る時しも走り來れる家僕幸六「其所ゐ在すゝ我が殿ならずや餘りおん歸りの遲きゆゑ汐迎ひゐ參りたりと言ッゝ古石の屍を見つけヤヽ又人殺しゐていゝ去る夜と言ひ今宵と言ひ殿ゝよく〳〵人殺しよ汐緣深き事ゝゐ。と逡巡して囁けゞ平澤合笑今宵のゝ財奪りゐらず是ゐゝ件ゐる事なるゆゑ汝ゝ彼所の木ゐ繋ぎし曲者を引て邸へ伴行き取逃さぬやう張番せよ我ゝ屍の料ひして猶寄り道われゞ少し後れて歸るべしと僕ゐ命じ武志を守らせ程近なる辻番所へ往き仔細と告て死骸を預け此由訴訟ゐ及びしゝゞ翌日檢視來り意趣切と定まりしゝへ死體ゝ與七郎の父某へ引渡されたり是すゐはち坪内ゞ惡事露顯の始めよして勢之丞ゝ許らず藤嶋を生捕り又古石の死骸より得し一通の證狀ゐて番町麹町へんの盗賊剪徑人殺しゝ此一件の爲すところと悟りたれども皆是旗本の嫡男汐番士ゐ召し出され居

る者なるゆゑ迂濶な事ゝ爲し難しとて是よりいよゝ坪内の行狀いろゝと探りけり又五郎左衛門ゝ古石の死を聞ても仕損せしと思ふまでわて念とせざれど武志の行方知れざるゝ何と無く氣ゐ掛り屈を隔てゝ痒きと搔の思ひゝ常ゐ絶ざるべし爰ゐ粂本丹吉ゝ平澤の敵へゐより父の仇ゝ坪内五郎左衛門ゐるを知り彼の邸へ出入して仇を討べき手術もがゐと心を盡したりけるが此ごろ坪内わて長屋を新築もると聞き手蔓を求めて入り込む事を得たりしゝば万事實氣々々しく振まひける故邸内の人々ゐ愛せられ昨日ゐ今日と日と經るうちゐ早晩仕事終りければ豫ての望みゝ空しけれど又做す術のあらんと思ひ道具を仕まひ歸らんと身支度する折若侍走り來て丹吉仕事の終りしならば職違ひゐれどゐ中庭の枝折戸外れて開閉惡し一寸直して貰ひたいと頼まれ丹吉心ゐ喜び拙郎ゐゝ宗旨違ひなれど今日ゝ千秋樂の揚り仕事で歸るゐも早ければ覺束ゐけれど致して見んとゐ侍点頭然らば我ゐ踵て來よと伴ふて入る庭口の縁先近くゐ何やら爲て居し侍女も三人寄ば姦しく「モシ千鳥さん覽じませゐ中庭ゐ居る植木屋ゝ梅幸の六三も及ばぬ男振り」「イヱ彼ゝ麹町の飛の者で丹吉とヤす男オヤ油斷のならぬ能ゐ存じと含笑ば「アレ私ゝ知らなかつたと明石さんがお敎へ被成たので御座いますト言ゐ明石ゝ顏赤らめ「イヱ〳〵千鳥さんが一番先「イヱ私ゝ存じませぬと爭ひ狂ふ時しもあれ殿樣のお歸りと知らする聲ゐ三人ゝ彼方へ走り往たりけり丹吉ゝ若侍の指揮ゐ任せ其處此處繕ひ思ひの外ゐ間どりて手元も見えぬころ漸く果し。ヤレ〳〵日が暮るのゝ遲く成たと獨語ち木の間を廻ッて歸り往く道邊ゐ茂る白萩の蔭ゐ女子の聲音して丹吉さまと呼び止るを訝しみッゝ立留り誰ぞと見れば奥の侍女明石とゝ呼ぶ女なるゆゑ何の用と問せも果す知らず顏ゐる强面いゐ言葉袖振わふさへ他生の縁とヤすならずや仮令一度の契りでも女子の身ゐゝ二世三世外ゐ男ゝ持まいと思ふて居ると忘れてゐト手先捕えて泣かこれ夫と氣が附丹吉ゝ氣の毒顏ゐ天窓を搔き。ホンニゐ前ゝ平川の天神さまの

揚弓場うめ本よ居たお明さんお屋敷風お成たので見損じたのゝ惡かつた何樣して此處へト訪りれゞ明石ゝ最ど耻かし氣よ妾の伯父ゝ破落戸辨慶吉と渾名呼るゝ程あるゆゑ揚弓場でゝまだ不滿藝者お鳴れの旦那を取れのと兎お角お泥水へ妾を嵌んの心あれど妾ゝ貴郎と添たさお貴郎の虚とゝ露知らずト言ひ掛たりしゞ吐息吻のみ涙お口隱るその折から花壇の植込お鳴く蟋蟀の舌打寂て聞へわたりぬ

○第七回

丹吉ゝ去年の秋の暑さお堪ぬ宵の問を程近なれゞ朋友お誘ゝれて平川お る天滿宮の境内へ夜毎納涼お出たるうち不斗した事より梅本と呼ぶ楊弓場の女お馴染憎からず思ふ心から貰ひて宿の妻お做さんと竊お親元を探り見れゞ同じ麹町の三丁目お住む博徒を以て名を知られし辨慶吉と呼る者の姪あるお因り丹吉ゝ家業ゞらお似ぬ正直律儀の質あるものから、是を痛く恐れ追お遠除て終お平川の社内へゝ足蹈なさず居たりしゞ今其女お此處で遇ひ是まで絶し音信も絶ぬ思ひの眞心と苦說ッ怨みッ取縋られ何と應も詮かたなく天窓のみ搔き居たりしゞ不斗心づく仇の手掛り是お增したる者やゝあるト思へゞ最ど詞を柔らげ情合知らずよ薄情者と恨み給ふも理なれど我とて甘露の日和とまち渡りお船の便宜を得ゞ最惜きお ん身と迎へとり妻お做したき願ひゆゑ朝お夕おの不自由を堪へて今よ獨身ぞ固き誓ひの豫言を忘れぬ證し察してよト脊中撫擦れゞ明石ゝ最ど嬉しさと又耻しさお袂を噛へ然う云た貴郎のお心と露いさゝりも知るならゞ何とてお恨みヤしませう妾ゝ固い奉公して矢取女の名を清め貴郎お妻よと言れたい戀の慾めの一心から伯父辨慶吉の家へ夜晝分ずお出お なる此お屋敷の若刀禰さまをお願ひヤし春の季から侍女奉公嬉しい事と思ふお付何卒早く此譯を貴郎お知らせヤし度と飽書ゝ書ても便りゞ無く空飛ぶ雁お托し往昔の人の羨ましく一日〳〵と過すうち長屋の傍普請始まり貴郎ゞ毎日傍出ゆゑ飛立嬉しさ此事を早く告てと思ふのも固い〆りの

淀口鳶の方の仕事に果今日が限りと聞悲しさ泣も心の内庭へお奥の用で來ませしに出雲の神のお情かと此處お忍んで待し甲斐ありて嬉しい其お詞何卒願ひを協へてと言ひも果ぬお丹吉が开りや我とても同じと家族の籍お早く入れ安心仕度に山々然たが今若刀禰と言ひたるに「ハイ五郎左衛門様のと」「フヽウすりや」「彼の仇」「エヽ何が」「否サその五郎左衛門様の氣質に伯父辨慶吉の家へ親しく出お て人の知つたる破落戸を厚く懇志下されてお愛し遊ばす程だから内を外なる行狀夫を苦お病む若奥さまの心勞お可愛さうで成ませぬ」「何さま左樣で有う夫お附て其方お餘儀ない頼みが有が聞て呉るか」「マ改まつての其お詞妻の妾お何遠りよ命お罹る事なりと否みにせぬを未だ疑ひてか他人振と怨みの詞お眞實夫と現れるれば丹吉点頭其サ餘儀ない頼みと言ふと言ひ掛四邊見まわして猶も一際聲を密め雲時何やら叫けば明石に聞毎お恟りなせる面持なりしが何に免もあれ此處にお奥のお座敷ぢか見咎められても貴郎の大事此方へ

來ませと手を採りて懸隔たる筑山の彼方の亭へゆくりなく逢た見たさの、思ひを遂再たび繰しの糸ぐちを結ぶに露の夢の間なれど千歳の秋とや契るなるらん今宵に両國の川開き續く日和お彌増る畫の暑さと忘れんと川に船ふて平地と做し橋に恰も人と以て造り渡せるお異あらず水お佳みし両岸の茶屋お飾せる提燈に光り怕明き連城の玉屋鍵屋が種々お咲す花火の仕掛もの數打揚て涼風の空ま嘯く虎の尾に千里の外お狂ひ獅子雲を凌げる登り龍に富士と越すと疑がれ星を壓せる千疋螢に宇治の夕暮を移る如し或ひに青柳星下り或ひに藤棚十二提灯盡ぬ眺望に有りながら是を見物する人々手を拍ち扣く賞讃聲の未だ消ぬうち消滅て行く烽火間も無き光りとに晋子の吟も思れぬ此繁雜を川下お少し遁たる屋根船に例の坪内齋藤辨慶吉の一群お下せし簾の其内ら四邊の景色を詠めッ酒酌交し山田古石などの話して居たりしが坪内に早十分の酔が引出す惡較計手お持たりし杯の酒一呼吸お飲み干して何か所得も有うかと連中

斗りで來たなれど堀出す山も氷の上を浮羅々と流して居た處が「然れば涼しいのみで曲が無い何と坪内氏向ふから來る屋根船ゐドンと當てゝ「ムヽ少しゝ飲代ゐ成うも知れぬコレ吉一寸耳だ。ナ手術ゝソレ斯うト何う小聲ゐ叫けば」成程そいつゝ面白へ向ふの船へ衝掛り問を能往べ船の中の「シィ大きな聲ゝ船頭が爲るのだアと巧みを合する惡漢が待ち搆へたる其處へ中ゝ陽氣な連彈ゐ音々ゆゝしき簾越し藝妓二人ゐ客二人三筋の糸ゐ浮れたちざんざ粧して漕下る船へ此方の屋根船が横から突沙理衝かけて辨慶吉が濁聲振立て「ヤイ此奴等ア是見よがしゐ騷ぎやアがつて此方の船へ衝當るたア寃無り但し遺恨ゝ意趣でも有ゝ返答をろと罵り掛る喧嘩の買出し彼方の船ゝ船頭も棹を命の商賣がら「巳が育目で衝突り返答の辨當のと面倒臭へ言ひ掛り手前ゝ何所の何奴だィと遣り返したる高聲聞き辨慶吉を搔除て刀ゐつ取り躍り出せし齋藤が武士の乘たる船へ突ゐて先ゝ後よと爭はゞ刀と以て裁判せん覺悟をせよと勢ひ猛く身搆へなし今や斫んと見せ掛れば船頭ゝ始めゐ似ず顏ゝ氷より蒼ざめけり客も藝妓も是ゐ驚き皆立出て額突ッ「ヤヨ殿實ゐも仰せの如くなるを船頭等が無禮ゝ全く酒を過せし鹿忽何卒ゐ免しあれゝしと甲一言乙一語四人等く謝する際時分ゝよしと坪内が簾を揚げて猿臂を伸し彼方の船と探れば觸る紙入二ッ是ゝ此客の物ならんと掴み寄て奪ひ取る外ゐゝ猶も齋藤が信禮らるゝより彌募り猛り立れば坪内聲かけ齋藤氏大人氣なし醉ての上の失策と陳謝らるるなら許し給へ早歸らんと急がせば齋藤ゝ苦笑ひなし「酒が無禮の罪を冠らば免して歸らんハテ命冥加ゐ奴ばらト言ッヽ辨慶吉の袖を引ば吉ゝ心得檜ゐ手を掛て押すと忽ち十反餘り船ゝ離れて他の船と船の間へ入るよと見るうち影と隱して失たれば納涼の船の人々ゝ呆れて少焉其船の行方を眺め居たりしゐ切るの張のと言ひしゐ似ず逃るが如く漕ぎ往しゝ如何なる件と訝りながら各元の座へ戻れば是ゝ什麼如何ゐ二名の客の紙入ゝ失て探せど見ざる故八々膝をハタと拍偖こそ今のゝ惡漢なれ我々が勸解

ゐ出たる其後で蔭から聲を掛た奴ゞ盗み取りしゐ違ひなしと悟りゝ爲れど今更ゐ詮方泣顔ゐゞ笑ひ芥子を嘗し如くなり。一人の客ゝ頭を傾け先頃仲間の長七ゞ麹町のお堀端で剪徑ゐ出逢ひ十両ほどの金を奪とれ其盗賊の形裝年恰好を話したゞ今の奴も夫ゐ似て居るから大方その悪者で有うと言を聞よりも一人の藝妓膝を直し船の去りたる方を見やり怨みの目元つり揚て吐息吻ッ、默然たるゝ是丹吉ゞ妹なる柳橋の藝者小住ゐて客ゝ然る町ゐ名の高き呉服屋の番頭ゐぞゐりける案下再説坪内ゝ内室水掉ゝ五郎左衛門の悪行日増しゐ募るを歎き用人瀧之進等と謀り諫めゐ手段と盡すと雖も五郎在衛門毫程も聞ず倍乱暴なる景況ゐ鬱々として額を疾し居たりしゞ一日つくゞ思ふやう殿のゐ乱行心附れゞ附る程訝しき事の限りゐて露見爲す日ゝ遠かるまじ若し事露れたる秋ゐ至らゞ妾ゞ身ゝ元來厭ふゐ足る者ゐらねど父上のゐ恥辱何でかりゐや在さん然るを大殿の知らぬ顔して居給ふゝ見限り給ひし物なるゥ豫て聞く五代の將軍さまゝ淫酒ゐ御心を狂はしゐん行ひ正しからざりしかゞゐ臺是を歎せられ竊ゐ公を刺して世の乱れんと爲しを治め給ひしとゐんゐ臺すら此の如し人の妻と成て夫の乱行増長ゐし罪の到るを安閑として傍よ看るゝ道ゐゐらず特ゐ妾ゝ花井甲斐守の胤ゐもせよ農家ゐ生れ養育の親善兵衛の貧苦と救ゝん爲め遊里ゐ身を賣んと爲したるを刀禰の助けゐ因て川たけの淵ゐ沈まざるのみゐらず田畑の中より擧られて今奥庭の手植の花荒い風よも當る事ゐくゐ表のゐ家來衆ゝ偖ゐき侍女下婢の大勢ゐ傅られ奥様の奥方の と尊敬はるゝゝ皆これ刀禰のゐ蔭ゐて世間の爲ゐゝ悪ゐもせよ妾ゞ身よゝ大善慈悲深いゐ恩と蒙れゞ刀禰若し罪を受るとさゝ妾も同し罪を受生るも死るも共ふすることそ願ゝしけれど夫でゝ刀禰の爲ゐ益なし養育の親善兵衛ゝゐ長屋ゐ在て既ゐ死去實の親甲斐守様ゝ世ゐ擧られて時榮ゞ仮令死とも心殘りの無此身妾とゐ救ひ下されし時の情ゞゐ本心なら命と棄てゐ諫めゥさゞ万ゐ一ッゐ心を改め給ふ事もゐらんゥ。何様でも今ゞ妾の

死どき噫嘻、然なりと胸を定め常ゐ離さぬ懐剣と帯の間へ押し隠し今ゐも歸り來給ふかと待ゞ短き夜なゞら僅へ餘る鐘の數四ッか五ッか睦みてし夢も取果あき妹と脊の緑しの糸も頓て切れなん鳴呼、此婦人親ゐ事て孝夫ゐ從つて貞霜雪の中ゐ色變ぬ松柏と等しき哉

○第八回

更け渡る夜ゐ寒からぬ風さへ漫身ゐ染て寂しき九段の坂下で往きかゝりたる武士を後から來りし一人の男が「モシ〳〵旦那と呼止れゞ武士振向き誰だと思ッたら辨慶吉か今ごろ此處らを何樣ぢたんだ」「相も變らぬ敗軍の歸りサ。モシ坪内の旦那夫ゐ附ても日外の川開きゑ此方の船を向ふの船へ勦沙里と當た仕事の骨折を花火の煙たァ咽て草芽も出來ねへ譯ありやァ何樣して下せへやす」「手前の左樣いふゝ尤だゞ彼の晩のゝ玉屋鍵屋の大仕掛かと思ひのほか線香花火の殼松で配分る程無つたから此頃ゐ鈴生と言ふ藝を見つけ塡合せを仕樣ゐサ」「アハヽヽァ戯談ぢやァ有やせん七八十ゝ物言ず所と僅か二十で手拍サ。ヘン夫も下さるィヤ分る氣ゞ無りやァ貰ふめへ」「何だと」「オヽ斯う見えても藤六の家ぢやァ幅も利なんだゞ常州で名と響かした臼井吉五郎今ゝ麹町のお遊び人辨慶縞の衣服ゞ好で明ても暮ても辨慶縞の一点張ゆゑ辨慶吉と異名を取り悪い方でゝ親分樣の己樣ゐ骨と折らせ臂鉄砲の殼ッ尻で追ひ拂はふとゝ押ゞ強へ」「フヽウすりや貴樣ゝ此方の弱味へ付込んで僅少の事から裏返らうと爲るのだゐィヤ感服な男の魂魄夫はゞ露見ゞ恐いのか左樣いふ旦那も矢張弱味な御挨拶命の惜いゐ變りゝ無い浮察しの通り井出の玉川鳴うとする蛙の口ゐも山吹色の金巒とめるゝと嵌ぬゝ旦那の浮思案鬼を出すとも佛を出すとも其處ゝ財布ゐ仕掛の機闘〳〵何と其樣ゐものぢやァ有やせんかと異ゐ持込む強談の剛面此方も然る者遽ゐ笑み「然一本參られて見りやァ此方ゞ悪かつた併彼の晩のゝ實ゐ二十ゐ足らぬ金で有たから夫ゐ搆ゝず少ねへれけゞ是式渡ぞうト出せゞ請取り數へて見て忽ち變る追從笑ひ「〳〵是ぢやァ澤山。

ナニサ例の私ちの酒癖で角芽立のも酔のする所業ゐ氣ゐ觸らべふ免し下せへ夫から此處でお暇を戴きやすゼト立別れッ、堀の端を往と既ゐ半町餘り坪内忽ち身を翻へし忍び足して追ひ掛け來り腰ゐる大刀拔く手も見せず弁慶吉ゞ肩先深く斬下れべ呻吟と仰面ュ倒れゐゞら已を切たい何奴だと言ふ顔見やりて五郎左衛門冷笑ひ骨折代を言ひ立ゐ心變りゐし已ゞ罪をも他ゐ負せんと爲る汝の胸中生して置てい邪魔ゐなるゆゑ態と多くの金を遣り夫から冷たい江金を身ゐ脊負せたる冥途の餞別禮を海口して瞑目と鼻で會釋罵れべ手負い齒を嚙み目を見張り左樣とい知らず飄蕩飄蕩と奸謀ゐ乘たゞ朽惜いヤイ聞已も程ゐく暗い處へ遣て去まふぞ」言ずと承知だ夫迄ュ閻魔を恃み今の怨みの胸を晴す算段でも去て待て居ろと咽喉を貫く止めの刀握つて吉い息絶ぬ眺い奴だト獨言帶際摑んで擔ぎ揚げ入水堀へ水葬ゐし刀を拭ひて悠々と歸る後方ゐ人有て躡て往くとい知ざりしゃ五郎左衛門い邸へ歸り竊ゃふ我部屋へ入らんと爲せし廊下の口腰元明石が夫と知り雪洞持て出迎へ左見右見ッ、大いゐ驚き。ヤヨ殿如何爲させ給ひしぞ汚召物い血ゐ染てソレ〳〵お疊へ滴り侍ると問れてそれと心附き瞳を定めて能見れべ裾い紅の絞りと做しまた腥き臭さへするゐぞ流石不敵の坪内も答辞ゐハッと差詰りしゃ是い鈍まし夜毎の酒の飲み過ゆゑゃ今宵い心地例ならず甚しき逆上ュて道々歩行ながら多く鼻血を出したるゞ是程の事ゐいわらずと思ひ全快なるまゝ破と忘れたり然れども人ュ依りて訝らぬとも言ぬゆゑ汝い竊やゃゐ池へ持往き汚穢くも思いふゞ洗ひ濯して臭まじきや賞與い多く遣いさんと言ふ言の葉も前後揃はず左のみゐ酔る容子も無ゆゑ惜い又彼のと心附ども我ゞ伯父の併慶吉と殺せしとい思ひの外なる汚出血請伏り侍るとて五郎左衛門の部屋へ走往しゞ間も無く寢衣と持來り血着の衣服と着せ替ッ是を小脇ゐ徐と抱へ扳是なしてゞ退きぬ坪内い我ゞ部屋ゐ入り偖も迂潤な事を做しけり是までい何度人を殺ても然る失策い爲ざりしが今宵い彼奴を堀へ投げ込みたるゐ

依り其とき裾へ血を染たりし物ならん兎ゐも角ゐも大事を知つたる彼の明石如何ゐ做してゥ遠ざけんと手を拱きし其折から後方の隔紙引き明て奥方水掉をづゥゐ立出五郎左衛門の褥間ちゥく手と突ゞ五郎左衛門うち見やり事有りげある其方の其振り何ぞ變つた事でも出來たゥト言れ水掉い潸々と落す涙を袖ゐ拂ひ變りし事の別ゐいゐられゞ飛鳥の川の淵を瀬よ替て變らせ給ひしい君の恙行ひゐぞ有る事新しきヤし樣よい侍れども妾い親の貧ゆゑゐ身を宿女遊女ゐ賣んとせしを田舍育ちゐ餘りたる恵みい天より高く恩い地より厚かましく殿の奥方ゐ内室と傳られる位ゐ成なゲら衣脱の蟬のから衣空しく其名を汚す斗りで奥方なゞ、人よ言れる武士の妻たる道を知らず又君のゐ恩ゐ報ゆるとも知らざれゞ迫て敢果あき妾ゲ命をお諫めヤす生贄ゐ奉り元のゐ心ゐ返らせ給ふを願ふゐん實ゐ刀禰い馬術劔法ゐ於てい並ぶ者少きよし人々評せり然れゞ將軍家の爲よ別て護術のゐ役ゐ當るゐ身ゐて大刀禰のゐ勸め又重職なれゞゐ取

高も多きふより金銀財寶何一ッ不足なきよ僕一人だも召供し給いずを忍びの漫歩行い遊びよ事を賭物の博奕とりを爲し給ふ爲と聞く博奕い天下の嚴しいを法度ふして如何なる下等の者も自ら戒めて爲さゞるよし若法を破りて是を弄べゞ梁田の藤六が類ひふして其性質ふ拘らず人押並て皆惡黨とやすならずや加之若博奕を弄んで露見せゞ請る罪い自業自得と諦めもせめを家の名折れ大刀禰のを耻辱を旗本の名を汚し給ふふい非り刀禰ふい何と思召と常の内端ふ引替て憚り氣なく演たりけると五郎左衛門空吹風と耳ふも掛ず打笑ひ戰國の勇士い治世の乱臣君の馬前ふ於て一番鎗を入れ一番首を取るもの奚ぞ家來を供ふ連れ身の守りと爲を喜ばんや嶽の高祖元の大祖の類ひ皆博徒より出たるよし英雄多く是を好む然れども我爭か天下の禁制を爲んや汝を煽動んと斯る事を告る者の有あらん藤嶋も我ふ對しより〳〵放埒を双べて諫めだて爲るい可笑再たび異見めかせし事を言ゞ新田村へ追ひ戻すぞ嗟五月蠅と叱すれど奥方少しも恐れず元來命を惜よゝて家ふ疵と附ず父上ふ耻辱と負せ奉らず刀禰の身の全うらん事を存ずれゞふ諫やすを無禮と思し腹立たしきあら妾を八裂ふ爲さるゝとも厭ひ侍らず夜の一人歩行博奕の遊びい止らせ給へかし聞入れてよと泣伏すと矣除けあゞら五郎左衛門ッゝと立て小喧敷い諫言だて三年先の鴉ふ爲せよアラ暑し涼んで來んと言ひ捨ッ廊下へ出んとする裳裾を採りて止むる奥方を右手の足伸蹴返して書院の方へ往たりけり折から風の吹送る鐘い上野か淺草か告る無常い斜陽の夫よりも猶更る夜よ心なき身も哀れなり増て夫の身の爲ふ花と視紛ふ顔も今や散んと豫て爲したる覺悟ながら是ぞ此世の別れうと思へい流石悲しくて涙の露の白玉や數珠ならなくふ繰返し〳〵尽ぬ案じい夫の身の上妾が死せし其後よて如何ふ成行き給ふらんふ年寄られし實の父花井の刀禰い如何よ思さん彌陀の御國ふ在します産の母さま養育の父さまのふ側へ往たら何と言ん大刀禰伊豫守様へ孝行らしい事も無く逆さまのふ手數掛るも過

世れ因縁只々冥路の心掛りゝ刀禰の御行狀の直らせ給ふを一目なりとも見し其後ゑ死せざるなれ然れど妾夫が爲ゑ命と楽ゞ万ゑ一ッ不愍と思し御後悔の御心も出給いんかと認め置し刀禰への書置よしや此身と反古ゑ成とも反古ゑゝ爲さぬ志し然りながら今のがゑ顔の見納めか噫悲しやと言ばえゑ言ぬ歎きゑ時移し死損じてゝ恥しゝト我居間ゑ入り孫て儲けの席へ座を占懐剣咽へ押當て南無や救世の觀音薩陀頼むゝ西ゑ在りゑ聞く産の母養育の父在す彌陀の淨土へ導き給へ南無阿彌陀佛彌陀佛と唱へも敢ず苦作と突込む氷の刃ゑ吭掻切てぞ死したりけるゝ其名ゑ戻らぬ水棹の方感ゑ堪たる最期なり斯とも知らず侍女明石夜もいたく更侍べるゑ御寢成り給いずやと五郎左衛門の容子見あがら徐と開たる襖の裡ゝ嵐吹きしく立田川韓紅ゑ恥ならぬ紅葉散るやと見る迄の血汐ゑ仰天肝を拔さぬ許りゑて戰き震ふ側の臺ゑ乘たる遺狀ゑ何思ひけん氣を取り直し其遺書を怖々ゑ取て手早く懐中ゑ隱し廊下の方へ轉び出事あり〳〵と呼立れゞ

人々何ぞと走り來て事の仔細を尋ねも敢ず奥方氷棹の子舍を見るより騒き騒ぐぞ道理ある

○第九回

五郎左衛門ゝ衣服の血汐を明石ゑ見られ少しく心ゑ掛る處へまた奥方ゑ諫言され有や無やと耳五月蠅ゑもひ彼の捨破知と言ゑがら廊下續きの様頬より庭へ下り風好き所ゑ凉み在りしが居間の方騒がしきゑぞ何事ぞと往て見れゞ此有様ゑ流石不愍と心の内ゑゝ後悔すれども素知らぬ顔ゑて狂氣做せしゑやあらんなど言紛らし父伊豫守ゑも由を告げ表向を病死と披露し形の如く葬式佛事を行ひぬ然れど伊豫守と用人藤嶋瀧之進ゝ諫めて死せしと察し知るゆゑ特さら哀れを催しけり偖も又明石ゝ訊らず遇し丹吉ゑ又無きまでの首尾を得て彌二世の契りをゞ固く約せし仇敵の手掛りと思ふゆゑ五郎左衛門ゝ擧動を早く告まく思ひても便りゝ更ゑ渚なるいせをの海士の漁船こがるゝ計り詮術先鳴や千鳥の淡路嶋ゑはで日を經

る物思ひゐ懲々として在たりしが一日丹吉些の用ありて邸へ來りしゝが飛び立思ひを押鎭め容子を窺がふ其内ゐ丹吉ゐ先頃繕ひし切戸を見廻る振りゐて庭へ往ゐ明石も夫と察し飛石傳ひゐ下り立ッ茂れる萩の後ゐ待とり「ヤヨ丹吉主去る夜見えしまゝ一月餘り何とて音信給ゐざる今日や來給ふ翌や顔見せ給ふゝと大内ゐ焚く衛士の火の焦す妾が胸をも知らず男心の習ひとて早秋風の破れ團扇乘給ふ氣りと怨ずれゞ丹吉ゐ頭を搔き何とて然る事あらん宜く思ふて見給へゝし像て賴みし事も有なれば朝ゐ晩ゐ入り浸りたき邸なれど故無してゐ門ゐて許さず層て俘身ゐ玉章一封贈るとさへ片糸のよりも附れぬ掟を知りッゝ怨み給ふゐ無理なりと言ゞ明石ゐホゝと笑み开ゐ實ゐ妾が懇じきまゝの過りゐりしと慇へて懷中搔き探り奥方の遺狀出し其大略を話して手渡しなし是も證據の一ッなるべく又其夜刀禰ゐ衣服を血ゐ染め戻り給ひしゐど言詳ゐ陳べ知らすれゞ丹吉聞度毎ゐ悅び勇み奥方のゆゑ死去ゐ怪しげなる風説もあるゆゑ俘身ゐ遇ひて實を聞んと用ゝ拵へ來りしゐ偖ゐ病死と言ゐ僞り自害せられし物なる此遺狀を開らゞ子細明瞭ならん辱けなしと押戴きて受納め人目ゐ掛らぬ其内ゐと往かゝる袖明石が引き止め开ゐ餘りゐり丹吉主盡ぬ話しも有ものを彼處へ到り給へゝし心強やと絆られ丹吉も辞みかね伴はれつゝ往く影を籬の裡より見止めたりし五郎左衛門是ゐ好き事の出來たり蹈み込んで引捕へ不義の罪ゐて手打ゐ做さゞ去る夜大事を知られたる舌の根斷て拂ふなりオゝ夫よと刀引き下げ忍び足茂れる萩ゐ姿を隱し心急くまゝ垂れし幹を蹈返せゞ倒れて錦敷のべる伏猪の床の儲けゐ似し蚊帳釣草も生るゐ秋草の中を走り拔け今兩人が茶座敷ゐ入り建切んとする障子蹴放し躍り込み不義者見附た動くなと猿臂を伸て捕えられ丹吉明石逃る術無く懲くのみ網羅ゐ罹りし鳥自物此席上ゐ穴あらゞ入らまく欲しと思ふあるべし五郎左衛門眼を怒らせ主朋輩を亡目ゐなし晝日中をも顧みず忍び逢とゐ不届至極不義ゐ是家の法度懲悟をれと拔き掛る刀の手元へ明

石ハ縋り傍意の如くおん眼と忍び大それた不義淫奔傍怒らせハ理り乍ら何卒丹吉ハ傍見遁しありて妾をのみぼ成敗願ひ奉ると居直れバ丹吉も身を進ませ「ソハ明石どの傍情過ぎて嬉しからずヤヨ殿明石と共ゐ拙郎をも傍成敗をと膝突き附ても親の仇敵自ら做せし罪科なゞら爭か己ゐ討るべき間隙あらバ喰ひも附ん手爲だゐ無き無念さよと思ハず流す血の涙五郎左衛門左見右見「明石是なる奴ハ丹吉と云ふ名うウム麹町の鷲の者となお愈生てハ。ヤ否さ不義の大罪兩人共ゐ成敗あさん覺悟致せと振り揚る刀ゐ吐嗟と支ゆる明石丹吉もモウ斯なれバと身搆あし不義の罪ゐ伏し一度ハ傍成敗を願ひたれど深き望みの有身あれバ滅多ゐ斫られハ致しませぬ「ウハハヽヽ望み有る身を持なゞら不義密通ゐ道を忘れ「サア其不義も心願を果さん爲の緣しの糸口親ある糸本丹藏ハ半藏外で非業の最期「ヤヽ「夫ゐ依て夜々學び覺えし撃劍仇と討たい拙郎の心願で傍座り升と見上る眼中濺血く双の拳を握り詰めサア切り掛れと身搆えゐ「ウム命惜しさの喰語汝等如きゞ仇討抔とハ笑ふゐ堪たる虚僞り聞耳掛ぬと切り付る間へ明石ゞ轉び入り身と構ゐして手を擴げ遮り止むる一生懸命「ヱヽ面倒な障碍すれバ已らと苛立坪内既ゐ危き後邊より五郎左衛門ゞ前へッと出三人ゞ間を隔て立し伊豫守「不義の成敗此者どもを手討ゐハ身ゞ致す汝ハ退き已ゞ子舍へ往々と突き除られて强悪も親の命ゐ爭ふ由無く畏りぬと丹吉と横目で見なゞら抜き持し白刃ハ鞘ゐ收めても收め兼たる胸の算用我と敵と察せし上ハ彼奴二人で訴人なさんも討られず父上寛大の所置あらバ此身の大事見遁す可やと躊躇ふぞ伊豫守聲荒らげ早く退らずやと叱するゐ詮方盡き此上ハ門番所の脇ゐ待て出で來る所を切り棄んと一人合点出往きげり伊豫守ハ五郎左衛門の影を見送り二人を睨へ討て棄べき奴あれど思ふ子細あるゆゑ特別の慈悲を以て許し遣ハす但し表門ハ人目多し夫その塀の切抜き門こそ我忍び歩行り出入口あれと敎へ金子一包投げ與へ悠然として立去りけり二人ハ少焉その後影伏し拜み敎へられたる塀ゐ立寄り此處

うと思しき所を引ぱ扉忽ち開たるゆゑ表へ窺み潜り出で又其扉を引き寄つ邸近傍い足早ゐ走りて去りしとい知らず五郎左衛門い必ず父が助け歸さんと此時庭口より出て邸内の長屋前を繞り通用門の傍ゐ目釘を濕し今や來ると待たりしい危ふかりける事どもなりさる程ゐ丹吉明石い坪内の邸を遠く離れけれぱ漸心落着て往く道すがら丹吉い明石ゐ打向ひ奥方の死去の模樣を聞たさと涉身ゐ逢たく思ふより前後見ずのとを做し涉身ゐ危ふき難を負せ流涙させしい今更ゐ後悔するとも詮い無れど皆拙郎の做る業過ちけりと嘆息すれぱ明石さし寄り开い反對な仰せとと妾こそ身を戀るの心から耐へ情なき最惜しさゐお家の掟も怖さも思はず忘れも得せぬ先月十七日と夕まぐれ緣ゐしを結ぶ糸萩ゐ身を潜まして待ち受つ心のたけを聞ゐてより月ごろ日頃の願言を叶へて給はりたるあらずや然る故ゐ御身をして二ッとあらぬ玉の緒も絶あん斗り危嶮らしめしい妾ゲ做せる業ゐ待り夫ゐ付き先の程身ゲ殺ゐ宣ひしい親の仇を覘ふゲ爲の不義淫奔とサア左樣して見れぱ當座の花と手折給ふの涉情頓て撮捨給ふあらんと言ふを打消し「イヤ开い賣詞ゐ買詞怒りゐ堪へず言ひたるなれど其始め平川天神の社内ゐ在し時よりの馴染好と思ふい夫ゐて知ん又仮令仇討のためゐもせよ十分の證據を得たるい涉身の賜物その功勞を空しくして見捨るなぞの不實あらんや此上い其方の宿と言掛て碇と手を拍ち眞ゐ忘れたり我事ゐ取紛れ問んとしてい問ざりき但父涉辨慶吉どのゐい前の夜九段坂ある牛ゲ淵ゐて人手ゐ掛り血汐い道邊ゐ在りたれど死骸い堀より出たるよし如何ある故ゐて非業の最期を遂られしど意趣切あるゥ喧嘩あるゥ其方い仔細を知りたるならんゲ其悔みさへ言いざりき氣の毒なる事ゑてけりと問れて明石い恂り做し开い眞實ゐ侍るや中小性衆の高話しゐ九段坂で人殺し有りとい漏聞たれど伯父なりとい夢些かも氣ゲ着ざりし十日ほど後の夜ゐい無りしや「實ゐ〳〵其ころ其樣ならアノ前ゐ和君ゐ話したる刀禰ゲ着物ゐ血汐と滌ぎ夜中ゐ歸らせ給ひしも調度同じと

「然すれバ其方の爲ゐも疑ひの無い伯父ぢの仇敵討て互ひゐ胸を晴すンまう間近」お話しせねバ和君ン知し給ンねど伯父と言ン表向き騙拘された同前ゐ貰ンれて來て程も無く矢場へ出された妾の身他の噂の陰言ゐ辨慶吉ン長脇差の中でも惡漢四人や五人の人殺しン有となれバ其罪科ゲ廻つて來て殺れたのでも有ませうゲ仮ゐも伯父と言ふ名ゲ附バ妾の爲ゐも同じ敵「然ン言ふ物の左樣した伯父ぢゲ達者で居てン迚も女房ゐ呉ン去まひ夫ゐ又殺された事を知らせて來ぬのン「サア夫ン出這る者ゲ親しい樣でも賭博の仲間其日〳〵ゐ替るゆゑ妾有と言ふを知らず稀ゐン知た者ゲ有ても坪内樣ゐ在を知らねバ打棄て置物あらんト言バ丹吉点頭て何ン兎もあれ我家へ來りたれバ聞く可き事話すべき事澤ゐある故先這入給へと明石を誘ひ戸口開てゞ入りたうける

○第十回

天網恢々疎ゐして漏らさず坪内五郎左衛門の惡事おひ〳〵發覺しその證明白なりけれバ是を捕縛なさんと用意萬端設置ちる時ン何時ゞ安政も四年ゐ及ぶ神無月常盤橋内なる評定所ゐ詰ゐひ設けの席ゐ着座ある面々ゐン筒井大和守花井甲斐守平澤勢之丞其他掛りの役々前後左右ゐ列を連ね坪内遲しと待ち掛たり五郎左衛門ン評定所よりの召し心ゐ掛れど何程の事ゐ有んと時刻を違へず出來りて席ゐ就しゲ平澤の座したるを見て愕然たり時ゐ大和守聲高く今日其許を召しン餘の儀ゐあらず近頃番町麹町邊を横行なし人民を惱し煩ンす惡徒を正んゲ爲ゐり开ン平澤氏ゲ能知れりと言ひッ、傍を佶と見れバ平澤一段膝を進め如何ゐ坪内氏覺えあるべし和殿おん旗本の身ゐ在ゐゲら强盜竇徑の所業を做し人を殺したる二人の證跡爰ゐ在りて顯然たり詳かゐ白狀あれと問掛れバ五郎左衛門自若として身を正し是ン又思ひも寄らぬ疑りを蒙る物ゐな誰人の讒言ゐや拙者ゐ取て覺え無きと偖〳〵迷惑千万なりと動せぬ樣ゐ平澤点頭「然らバ此品ンヤ、「金龍袖乘の高彫ン人も知たる和殿の小柄」如何ゐも拙者の所持なりし

が去る夜遺失ゐ及びたり然も有んで其場所ゐ半藏ゐ門北の堀端で坐らうゲ「イヤ當推察ゐ免を蒙る推量ならんや眼下暗ゐ閃爍く及の電光跡ゐ殘るゐ老父の死駭何と覺えゲ」ゝ存せぬ抔とゐ卑怯千万「ナニ老父の死骸ゐ拙者の業とな遺失小柄ゲ證據ありとゐ事可笑いト空嘯けゞ平澤重ねて「知らぬと有ゞ夫でよし城中の詰場ゐて密談せしを竊聞されしゐ怖氣立ち拙者と討んと兩人ゲ潛伏ゐたる善國寺谷雨も暗夜の不意を討とゐ後ゐて知りし貴殿の指揮同士討させて一人の命ゐ其場ゐ失ゐせても搦め捕たる藤島武志「ヤア」サ其口ゐらして漏たる惡事貴殿ゐ斯ても知らぬとナ「イヤ一向ゐ覺え御座らぬト飽まで言ひ張り屈せぬ顏色筒井大和守冷笑ひ「盜賊猛々しとゐ貴殿の事ゥレ證人を此處へ出せと命ずれゞ「應と答へて切戸口より引出し椽先近く押居るゐ縛と掛たる藤嶋武志續いて丹吉明石を始め殺害者殘らず居並ばせり此時花井甲斐守進み出如何ゐ坪内氏何はど陳しらるとも證據斯く明瞭ゐり此ゐ是娘水棹ゲ遺狀貴殿の行ひを繰り返し

返し諌めし文ゐても又知れたり潔く白狀あられよト言和らゐ説諭せり實よ料られぬゝ人の身ゐて翌日ゝ白洲の對ひ合ひ調べらるゝ身調べる身鉈も鼻も地を變る今日をバ豫て斯く爲じと盡す水棹ゞ操さへ流るゝ水の泡沫と消て敢果なくなりたりしを思ひ出てゥ武士の涙ゝ流石出さねど語數言す愁然たり此時平澤再度膝を進めて言ふ加之是此密書ゝ古石の懷中より得たるなり其外斯證人多けれバ罪ゝ恰も鏡ゐ掛て見るゞ如くゐ明瞭けし然でも知らぬと陳じらるゝや。サヽ斯ても覺え無しと言やト問ひ詰れぶも坪内ゝ自若として色も變せず猶答んと做したる時藤嶋武志喘涸し聲音ゐて「ヤヨ刀禰斯露見れし上ゥちゝ所詮通るゝ術あらじ速ゥゐ白狀あし給へ拷問の責を請苦痛を爲ぬゞ增しならんと言せも果す坪内聲を荒らげて默れ武志汝ちゞ如く責呵るゝゞ恐ろしとて知らぬを知れりと言者ならんや往昔より拷問ゐ遇苦痛の爲ゐ早く死だが增抔と諦め無實の罪ゐ命を落す族少なゥらず我ゝ天下の浮旗本ゐり嗔と言バ何百万騎の敵と雖も不屑せぬ者が奚ぞ責苦を恐んや此上幾百の證人何千の証據あらうとも覺え無きことを曲て覺え有と言んや然れど我を誣んとして問立するを都度々々ゐ答んゝ面倒なるゆゑ最早この上他と詞ゝ交さじと眼を閉て泰然たるゝ大膽不敵と見えたりけり此体ゐ大和守始め他の人々等も五郎左衛門の伏罪容易ならざるを知るゆゑ本日の吟味ゝ中止ゑたれど罪科ゝ既ュ明瞭なるゆゑ傳馬町の牢屋敷ゐ下し揚座敷へぞ入れたりける此日齋藤柵次郎ゝ坪内ゞ評定所へ召れたるを知らず賭博の宿とせし待合茶屋ゐ到り連中もや來る坪内ゝ如何せし遲き事ゥゐト只一人退屈顔ゐ座せし折柄動也々々入り來る探索方が用と聲かけ取卷を取て投除け柵次郎さてゝ事みゐ露見せしな然れむとて烏滸々々と縛ゐ付べき我ならんやト胸を定めて大音聲ゐ汝等ゝ何奴ぞ武士ゐ向つて失禮至極其處除けヤッと勢ひ烈しく太刀引抜いて振り翳し仁王立ュ衝、たち寄バ斫らんと身搆るゐ誰一人進む者無く只逡巡りして動搖めくのみ時ゐ捕手の頭持多勝輔と言ふものこの有樣

を見て進み近づき其許らの巨魁たる坪内五郎左衛門ゝ既ゝ召捕れ罪ゝ伏せしを御邊何の爲ゝ無益の殺生を做さんと爲るぞ今となり何十人切り捲るとも網ゝ入る鳥穽ゝ陷し獸ゝ異ならず惡ゝ強きゝ善ゝも強しと聞く速ゝ繩ゝ掛り我々ゞ爲ゝ勸務の功を立させられよと言ひければ齋藤忽ち刀を投棄坪内伏罪せしと有べ罪なき汝等を切て何ゝせん先縛めよと手を廻らし縛ゝ附きしゝ流石旗本の氣性ありと其事のみゝ賞せられたり爰ゝまた鳶の丹吉ゝ五郎左衛門ゞ罪ゝ伏せざるを却て悅び豫て復讐の願ひあるゆゑ平澤勢之丞を師となし夜々擊劍を學び又千葉周作齋藤彌九郎伊庭軍兵衛などの道場へも往き劍術稽古して今ゝ熟達なしたれべ仇討の願を平澤ゝ賴み入れたるゆゑ平澤ゝ丹吉ゞ事を以て大和守へ談じたるゝ丹吉とやらんゞ孝心厚きゝ感ずるゝ餘り有れども存じの如く敵討を表立免して爲せるゝ法度なる故今更是を扱ひ難しと餘儀なき樣ゝて斷りけりさる程ゝ筒井大和守ゝ再たび坪内を白洲へ呼出し坪内既ゝ伏罪せりと僞りて召捕えたる齋藤を以て突合すれども一言半句の答へをせねべ今ゝ拷問の外無しとて是より日毎ゝ呼出し指を折り石と抱かせ手を換品を替力と盡して拷問なし膝挫げ腕摧けたれども心毫も屈せず自若として始めの如くなる故掛りの官吏も其强膽なるに舌を卷慶安の往昔丸橋忠彌を拷問ゝ掛たる話しゝ有れど夫ゝ見ぬと坪内の如きゝ今の世絶て無しと評せしかべ此事を語り傳へ聞傳へ湯屋理髮床ゝ至るまで其噂のみ喋々たり坪内家の用人藤嶋瀧之進ゝ水棹の方の諫死も水の泡と成り遂ゝ斯の如きゝ至りけれど豫て思ひ煩らひし事あゞら今更の樣ゝ周章なし主人伊豫守と計り剪徑强盜人殺ゝ落ざるこそ僥倖なれ早く是を殺すゝ如じと竊かゝ牢獄の下官吏ゝ手を廻し坪内五郎左衛門及び齋藤柵次郎ゝ毒を與へ是を殺して病死の披露を做したりけり嗚呼坪内五郎左衛門の如き拷問の苦痛ゝ屈せず數日の責を恐れず耐堪える程の膽力ありながら掛る小事ゝ關係ひて惡を做し命を落し名を汚すゝ又惜むべき事ゝあん斯りけれべ平澤勢之丞ゝ

丹吉を我屋敷へ呼び汝をして丹藏の仇を討ましめんと厚く心を用ひ猶動き無き確證を得てと思ふうち五郎左衛門の惡事上ゐ聞え此方まで知れるゞ如く吟味の席へ立合せられ忽ち捕縛ゐ着たれゞ後れたりとい思ひたれど也人を殺せゞ其殺した者を政府ュて殺し私ゐ仇と報ゆるい法の赦さゞる所故殘念ゐい存ずるゐらんゞ汝の敵い公儀ゐて討給ひしなり迚小さなる沙鍋を一枚取り出し是いこれ坪内五郎左衛門ゞ騎馬調練の際將たる時冠り首ゐ替たりしゐるを我分捕して置るゐれゞ是を五郎左衛門ゞ首と見做し衣を刺たる漢土の古事ゐ倣ひ此沙鍋と父丹藏ゞ墓ゐ手向て祭りと爲せよ又此程汝ゞ妻と爲りし明石とゝ呼ぶ女の伯父辨慶吉を殺せしも五郎左衛門ゐるい我僕幸六の確ゐ認る所なれど證據無きを以て調べの席ゐていい言はざりし此事をも妻ゐ告よと懇切ゐ敎へ諭され丹吉い彼の沙鍋と押戴き平澤ゞ恩を謝し戻りたりしゞ父丹藏の忌日を待て是ゞ祭りを做せりとゐん却說藤嶋武志い遠嶋流罪ゐ置せられ坪内五郎左衛門齋藤柵次郎い吟味中牢死のヤ渡しゐて事落着ゐ及びけり又丹吉明石い思ひ通り夫婦とゐりて今猶麹町ゐ存せりとゐん其外坪内家の談柄あれども文外なれゞ省き看客の欠伸と共ゐ終れり呵々

沙鍋調練坪内譚終

明治十九年一月廿七日出版御届
同　年十月　出版

〔正價金拾五錢〕

編輯兼出版人　東京京橋區銀座二丁目六番地　千葉茂三郎

發兌所　稗史出版　共隆社

賣捌所　東京及各地方書肆繪双紙店

稗史出版書目

柳亭種彦閲　尾形月耕畫
○復讐浮木龜山　繪入全一冊　定價七拾五錢
槇廼舍雅山著　尾形月耕畫
○世者情浮名横櫛　繪入全一冊　定價金四拾錢
柳亭種彦纂編　望齋秀月畫
○春色黄金花　繪入全一冊　定價金四拾錢
柳亭種彦著　朝霞櫻芳幾畫
○朝顔垣殘秋月　繪入上下二冊　定價金五拾錢
槇廼舍雅山著　尾形月耕畫
○自來也物語　繪入上下二冊　定價金五拾錢
柳亭種彦著　歌川國梅畫
○花兄譽片腕　繪入全一冊　定價金四拾錢
曲亭馬琴著　尾形月耕畫
○富士淺間三國一夜物語　繪入上下二冊　定價金五拾錢

爲永春江閲　稲野年恒畫
○姫路美談梅雨の松風　繪入全一冊　定價金三拾錢
栗杖亭鬼卵著　稲野年恒畫
○長柄長者黄鳥墳　繪入上下二冊　定價五拾五錢
柳條亭花彦著　大蘇芳年畫
○歌島文庫噂の橘　繪入全壹冊　定價金五拾錢
槇廼舍雅山著　尾形月耕畫
○實説名畫血達磨　繪入上下二冊　定價四拾五錢
元祖柳亭種彦著　尾形月耕畫
○涙手摺昔木偶　繪入上下二冊　定價五拾五錢
柳亭種彦著作　尾形月耕畫
○名器之茶入名妓之古跡女夫髷操競　繪入上下二冊　定價四拾五錢
式亭三馬編述　尾形月耕畫
○大津土産吃又平名畫切刃　繪入上下二冊　定價金五拾錢

柳亭種彦著　尾形月耕畫

○黑白染分　繪入上下二冊　定價六拾五錢

曲亭馬琴編演　尾形月耕畫

○美濃八丈奇談　繪入上下二冊　定價六拾五錢

槇迺舍雅山著　尾形月耕畫

○霞幕春山臺　繪入上下二冊　定價金五拾錢

山東京傳補綴、稲野年恒畫

○櫻姫曙草紙　繪入上下二冊　定價五拾五錢

曲亭馬琴作　滝村弘方畫

○膏油橋河原祭文　繪入全一冊　定價金三拾錢

曲亭馬琴作　尾形月耕畫

○信田妖手白猿牽　繪入全一冊　定價金三拾錢

十返舍一九著　稲野年恒畫

○美濃近江寐物語　繪入全一冊　定價金三拾錢

曲亭馬琴作　滝村弘方畫

○襲褄辻花染　繪入全一冊　定價金三拾錢

振鷺亭主人著　稲野年恒畫

○阬妹脊山　繪入上下二冊　定價五拾五錢

曲亭馬琴戯作　稲野年恒畫

○化競丑満鐘　繪入全一冊　定價三拾五錢

柳亭種彦作　外題尾形月耕畫

○貞烈美談小夜時雨　繪入全一冊　定價弐拾五錢

鳥有山人著　尾形月耕畫

○稀奴奇遇玉照物語　繪入上下二冊　定價金五拾錢

柳亭種彦作　滝村弘方畫

○巷説兒手柏　繪入全一冊　定價三拾五錢

曲亭馬琴著　滝村弘方畫

○復讐奇談稚枝鳩　繪入上下二冊　定價金五拾錢

山東京傳作　稲野年恒畫

○濡燕子宿傘　繪入全一冊　定價金三拾錢

曲亭馬琴作　尾形月耕畫

○殺生石後日怪談　繪入上下二冊　定價金四三拾錢

曲亭馬琴作　滝村弘方畫

○雲妙間雨夜月　和本全二冊　定價金七十錢

山房庵主人著　稲野年恒畫

○神功皇后三韓退治會圖　洋本全一冊　定價金一圓

鶯亭金升作　尾形月耕畫

○沙鍋調練坪内譚　洋本全一冊　正價金十五錢

曲亭馬琴作　滝村弘方畫

○風俗金魚傳　刻

柳亭種彦作　尾形月耕畫

○御伽話手遊八景　刻

絳山著　外題尾形月耕畫

○袈裟御前貞操譚　刻

柳亭種彦作　稲野年恒畫

○梅柳春雨譚　刻

式亭三馬編　尾形月耕畫

○流轉数回阿古義物語　刻

山東京傳作　稲野年恒畫

○復讐曲輪達引　刻

柳亭種彦作　尾形月耕畫

○伊呂波引寺入節用　刻

元祖柳亭種彦著　金子兼彦縮畫

○邯鄲諸國物語　刻

山東京傳著　尾形月耕畫

○復讐奇譚安積沼　刻

元祖柳亭種彦作　滝村弘方畫

○操競三人女　刻

元祖柳亭種彦作　尾形月耕畫

○於千代半兵衛新うつぼ物語　刻

山東京傳作　滝村弘方畫

○女忠信男子静釣狐昔塗笠　刻

曲亭馬琴作　尾形月耕畫

○傾城水滸傳　刻

白

稟

新刊の書帙ハ魁字の印あるハ。文昌星の象ハ換て、千里疾行の延喜を祝ム爲おりとぞ。其魁の字ハ因む。梅花の盆栽と共に發市す。新版の草双紙ハ。臘尾から。初春ハ限りし。開化進歩の文運ハ小説稗史も自由を得たれバ。定まる時期も夏過て。秋でも冬でも新版を續々販賣す其中ハ。本社ハ毎月二三種の。發兌を約して開業せし月日も淺きハ老舗と成しハ花主諸君のお庇蔭と弊社ゞ勉強他ハ優て。摺彫あんゞも精工ハ。實價も廉き故おるべし。とハ手製味噌の辛過ると思食バ和て加減と汁椀の漆ハ剝ぬ赤本も開化ハ進む洋本仕立。猥褻を省き勸懲の理を旨とする稗史の出版社とハ尋有て多少ハ限らず。新版古版とも陸續御購求の程を偏ハ冀ム

東京京橋區銀座貳丁目六番地

發兌所

稗史出版 共隆社

091355−000−0

特11−856

沙鍋調練坪内譚

鴬亭　金升／編

M19

DBN−2253